資料2

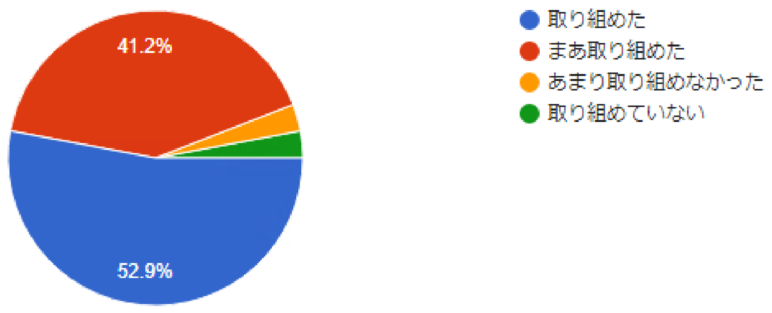
府中市特別支援教育推進計画に関する学校調査結果

1　通常の学級における特別支援教育について

１「障害者理解」についての取組状況について伺います。

１－１　次のうち、当てはまるものを選んでください。

34 件の回答



「取り組めた」または「まあ取り組めた」を選んだ方へ伺います。

１－２　成果について教えてください。（31 件の回答）

・オリンピック・パラリンピック教育と合わせて、福祉の大切さの理解を深めていけた
・オリ・パラ教育で、障碍者教育に重点を置き、東京 2020 パラリピアンによる直接交流会を 3 年間継続できた。また、特別支援教室「きらり」について、拠点校巡回教員に紹介動画を作成依頼し、児童及び保護者に視聴する機会を設定した。
・総合的な学習の時間の授業や、オリパラ教育によって、理解が深まった。
・オリ・パラ教育で盲導犬の活動について講演会を実施した。
・パラリンピック選手による授業を行い、障碍者理解が高まった
・車いすバスケやブラインドサッカーを通して障碍者についての理解を深めた。
・特別支援学級との交流
・特別支援学級の児童との交流行事、交流授業など
・けやきの森学園の先生に来校していただき、障碍者理解を促進するために毎年第一学年対象に講話をしていただいている。また、副籍生徒の作品を展示する特設のコーナーを設け、積極な交流も行っている。これらの取り組みを通じて、生徒の障害者理解につながった。
・個に応じた指導について、理解が深まった。
・校内委員会を中心に生徒個別の課題に対して共通理解を図り、個別の指導を計画的に行った生徒の行動が改善（落着き、集中力等）された。
・共生社会に向けて理解を深められたこと
・知識として得ることができた
・全教諭で研修を通して共通理解することができた。

・生徒への支援を職員連絡会などで共通理解できた
・特別支援教室つばさについての理解が深まっている。
・理解が深まった
・様々な体験を通して取り組めた。
・特別支援学級担任が、２年生に仲よし学級の紹介をし、児童が抱え困っていることを理解したり、特別支援教室の巡回教員が３年生につばさ教室の紹介をして、困り感を理解したりすることができた。
・教育課程内で全学年で取り組むことにより、意識醸成が図られた。
・各学級の実態に応じて、児童に分かりやすく話をしている。
・授業のユニバーサルデザイン化を意識できるようになってきた。
・道徳科において各学年障がい者理解について考える時間をもつことができた。
・研修会を行い、特別支援への理解が深まった。
・児童への理解が深まった
・難聴言語通級指導学級、特別支援教室の教員に様々なケースについて教えてもらったり、具体的な対応の仕方について教えてもらったりしたため、教員の意識が向上した。
・体験活動を通して、相手意識が芽生え、人権感覚が育った
・教職員の児童理解、児童間のかかわり方が深まった。
・特別支援を要する生徒への対応が変化し、職場として理解しようという姿勢がみられる
・4 年生の手話の授業において、ろう者への理解が図れた。
・特別支援教室に通室する児童と協力的なかかわりができる児童が増えた

同じく、課題について教えてください。（29 件の回答）

・コロナ禍における交流方法について
・コロナ対応を踏まえた活動内容の精選
・コロナにより、直接的な特別支援理解についての授業は行えなかった。
・コロナ禍のため、直積的な交流の機会が減っている。
・コロナ対応しながらのコミュニケーションのあり方の検討
・コロナ禍における感染防止対策
・教員による意識の個人差をなくしていくこと。
・全ての内容を網羅できていないので、今後の指導の課題としたい。
・粘り強く働きかけを行わなくてはならないので教員の意識改革が必要である。
・自分事として考えることが難しい
・細かな支援方法については、今後も研修が必要である。
・専門的な知識を持つ人材の活用
・法律上の知識を得ること
・令和 4 年度への具体的な継続計画が課題である。
・様々な体験を継続していくための連携及び引き継ぎ
・クラス全体の児童に向け活動を入れるなどしているが、まだまだ十分な理解には至っていない。
・性同一性障害（性別不合）に関してのより一層の理解推進。
・学校全体として同じ教材や資料を使っての指導はしていない。

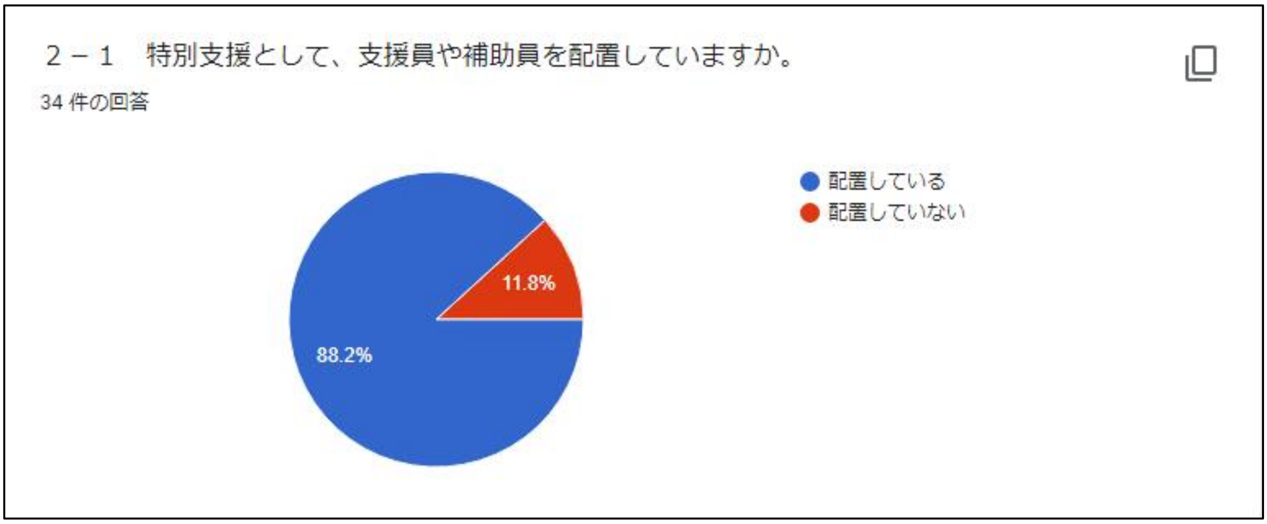
・この１年間は、体験的な学習ができていない
・個別の対応については、十分に配慮できているとは言い難い。
・継続的な指導ができていない。
・授業を通じて、子供たちと考えることができたが、それを生活にどのように生かしていくのかが課題である。
・合理的配慮に関しての理解が不十分である
・共通理解の時間や、方針を決定するための会議の時間がない。
・様々な障害を持っている人とのコミュニケーション
・様々な配慮の仕方があるので、より円滑な特別支援を迅速に、積極的に行うためには経験を重ねる必要がある
・教育課程に位置付けるなど組織的・計画的な推進が必要である
・特にこのことについて課題を感じない。
・特になし

「あまり取り組めなかった」または「取り組めていない」を選んだ方へ伺います。

１－３　なぜ、「あまり取り組めなかった」、「取り組めていない」のか理由を教えてください。（1 件の回答）

・毎年、通常学級第２学年との交流学習を深めているが、コロナ対策による活動縮小により実施できなかったため。通常学級の時数の問題があり、毎年十分な理解教育は取り組めていない。

問２　令和２年度から、会計年度任用職員制度が開始されました。「学校経営支援員」や「特別支援学級補助員」、「合理的配慮支援員」の雇用形態の見直しをしてまいりました。支援員や補助員について伺います。



２－２　「配置している」場合、支援員を活用するうえで、工夫していることはありますか。（28 件の回答）

・特別支援教育コーディネーター、養護教諭、巡回指導教員などと連携している。
・できるだけ活動が多い場面での支援をお願いしている。
・支援を必要としている生徒と支援員とのコミュニケーション能力を重視している。

・定期的に校内委員会でどの児童にどのような支援が必要か検討して、支援員に依頼している。
・児童の特性に合わせて支援員を配置する。
・特別支援教育の理解
・担任と連携して、支援内容を共通なものにする。
・毎日支援員がいられるようにする
・サポート体制
・生活・学習支援員の通常業務の中で、要配慮児童への個別的な対応について、具体的に説明するとともに質疑応答の機会をもっている。
・各担任との情報共有をできる限り行う。
・学校経営支援員は、集団に馴染めない児童の補助をしたり、学習になかなか一人では、向かえない児童に配置したりするようにしている。特別支援学級補助員は、一人一人の適正に沿った補助をしている。
・週ごと、行事ごとに予定の共通理解を図っている。ただし、その共通理解を図る時間の確保は難しい。
・個別支援ではなく集団支援をしていくこと。
・要請のある学級や児童に配置している。
・具体的に要支援生徒を指定して支援を行い、報告してもらっている。
・教育的効果
・負担になりすぎないように、１週間を３人で分担してもらっている。
・一人一人の児童に合った対応ができるよう担任と情報共有をおこないながら、対応の仕方を考えている。
・配慮が必要な生徒が、必要とする時間割を組んでいる。
・特別支援構内委員会を反映して配置を決めている
・生徒それぞれの課題に応じて、適切な対応を共有している。また、それぞれの特性に応じて適切な配置を工夫している。
・クラスや児童の実態に合わせた人員を配置するようにしている。
・校内委員会を舞台として、特別支援コーディネーターが重要度に応じた割当をした。
・児童や支援員の特性に応じた配置
・担任に学級の様子を聞きとりをし、必要性が高い学級を中心に配置している
・シフト表を事前に提出していただく。
・職員室にスケジュール調整できるボードを用意し、支援が不要な時間割の時には必要な多児童へ回る工夫をした

２－３　「配置している」場合、成果について具体的に教えてください。（28 件の回答）

・児童が安心して活動できている。
・子供の成長に合わせた声掛け、支援が行えた。
・支援員同士で情報を共有しながら支援のない状態を作らないようにしている
・継続的な個別指導によりきめ細かな対応ができること
・教室の一斉指導に困難のある児童が、授業に参加しやすくなっている。
・個別指導

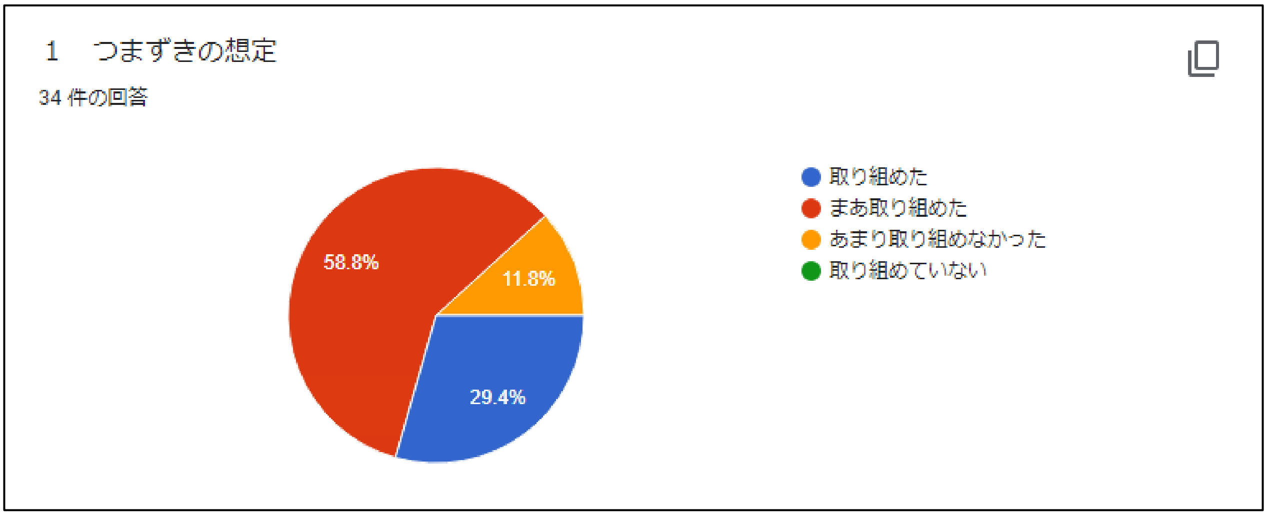
・全体指導の際、必要に応じて個別に支援をすることができる。
・人との関わり学習面での補助で効果が出ている。
・トイレの介助ができること
・当該児童とのコミュニケーションがはぐくまれつつある。
・子供の状況に応じて、個別対応が必要になった場合に、担任が全体指導をストップすることなく進められる。
・渋り傾向の児童が、徐々に集団に入れるようになったり、登校がスムーズにできるようになったりした。学習を取り出して行っている児童は、教室でも落ち着いて取り組む姿が見られるようになった。
・児童への丁寧な生活・学習支援。十分な安全管理。
・より多くの目で子供を見ることにより、子供の安心感が増している。
・教室にいられない児童や一斉学習についてこられない児童の支援に成果があった。
・全職員で情報の共有ができた。
・児童理解、安全管理、学力向上、課題発見、保護者との連携など
・教員への負担、他の生徒への授業妨害を軽減できている。
・情報共有を行い、その児童に合った対応のしかたを続けることが児童の心の安定につながった。
・実技教科など、支援が必要な状況が分かりやすく、支援もしやすい。
・個々の児童に応じて適切に対応できる
・支援員配置の工夫により、生徒の生き生きとした活動につながった。生徒の安全が保たれている。
・クラスや児童の状況が落ち着いてきている。
・個々の児童の困り具合に応じて、支援が講じられた。担任が他の児童へ関わる時間が増えた。
・学級経営の円滑な進行
・児童が安定して授業に参加できる。学級担任が円滑に進めることができる
・教室から飛び出す児童への対応ができた。
・年間を通してなるべく同じ学級で児童支援をすることで児童との信頼関係を築くことができた

同じく、課題について具体的に教えてください。（29 件の回答）

・配置される人数では手が足りず、支援が十分ではないこと。
・全ての時間にかかわれる配当予算が得られず、途中で打ち切りになってしまった。どうしても、支援をつけてもらわなければならない児童に対して、難しい対応だった。
・支援員の配置予算に限りがあり、支援に必要な児童全員に対応できていない。
・児童の成長に合わせてかかわり方を工夫していくこと
・特別支援教育の理解
・支援が必要な子の人数と支援員の人数が伴わず、十分な支援を行えない。
・専門的な知識のある人材確保
・ケース会議の時間と気力が必要であること
・生活・学習支援員の資質・能力によって、依頼できない場合がある。
・全時間の配置ができていないため、成果に挙げたことができないことがある。
・支援員や補助員の配当される予算に限りがあるので、まだ十分に支援できているとはいえない。

・共通理解を図る時間の確保。市の勤務時間の制約により、柔軟な勤務体制をとれない。（休憩時間の縛りなど）
・人員配置のための予算配当。
・人数が足りていない。
・合理的配慮支援員の活用について、年度途中に打ち切られることがあった。
・時給単価が安いため、人材確保が難しい。勤務形態の自由度が低いため、人材確保が難しい。他の支援員との兼務ができない。
・勤務時間に制限があることが大きな課題
・ダウン症の生徒の学習指導に当たってもらっているが、学習指導の効果は少ない。
・一人一人、対応の仕方が違うので何とも言えないが、かじられた時間の中での対応となるので、継続して支援に当たれるような体制をつくれるようになることが必要だと考える。
・必要に応じて常に支援員を配置できるわけでない
・配置可能な曜日が限定されていたため、生徒の特性に応じた配置ができないところもあった。
・人員の確保が難しい。また、予算が足りない。
・人材の確保。機動力がほしいので近隣の大学生に募集をかけたが十分とは言えない。予算の増強。健全な学校運営を行うためには 12 月の初旬で予算が尽きた。次年度は、130%増しで要求している
・配慮を要する児童の増加への対応
・人材不足。曜日によって配置できない日がある。
・予算不足。
・特になし

問３　校内においてユニバーサルデザインに基づく指導と学級づくりのために工夫していることは何ですか。１～１４の項目ごとにそれぞれの取組状況、成果と課題について具体的に教えてください。



成果（30 件の回答）
・教室環境について、特に黒板周りの環境を整えることができた。
・教室の掲示物の貼り方の工夫を行い、落ち着いた学習態度を意識させた。
・想定の範囲内でつまずきが見られることがあったので、次の学習課題に取り組む予測ができた。

・あらかじめ手立てや支援方法を用意することで、個に応じた指導を余裕をもって行うことができた。
・つまずきを克服しやすくした。
・掲示物の確認
・あらかじめ予想されるつまずきに対して、どのような支援が有効か、指導計画を立てることを行った。
・統一した黒板周りの環境が整えられている。
・教室前面の壁面をすっきりさせたこと
・児童が見通しをもって、学校生活や学習に取り組めた。
・算数を習熟度別授業にすることで、習熟度に応じた支援を行えている。
・校内研究のテーマとして取り組み、講師の先生に具体的につまずく項目を挙げてもらい、それぞれの学級の児童を思い浮かべながら取り組むことができた。
・教室環境整備のユニバーサルデザインについて、学級主任が講師となって研修機会を設けることができた。
・スモールステップ目標の設定と視覚化
・理解しにくい課題を予想して授業の構成を考えることができた。
・繰り返しの学習ができた。
・プリントやプロジェクターなどによる授業内容の可視化に取り組んでいる教員もいる。
・座席や掲示物の工夫、持ち物の工夫、ICT の活用など
・質問の意味がよくわからないが、授業準備の段階で行うし、ワークシートの確認によって、キャリアを積むことでできるようになると思う。
・ICT 機器の活用（ビッグパッド）により、学習資料を拡大して映し出すことで、視覚的な部分で児童に分かりやすい授業を行うことができた。
・授業中に目標とゴールを設定し、授業の UD 化を進めた。
・特別支援の児童に応じた環境を設定した
・黒板まわりの掲示物の配慮やカーテンの取り付けなどを行った結果、校内のすべてのクラスが落ち着いた雰囲気になっている。ICT 機器を活用することで授業にもメリハリが生まれ、分かりやすく効率的になった。
・タブレットを使った授業が多くなり、視覚優位の児童にとっては効果的であった。
・1 時間の授業の流れを掲示することで、見通しが立てた。
・あらかじめ個別対応を想定し、対応した
・各教科始動の際に教職員の意識が高まり、配慮や工夫が認められるようになった。
・初発で取り掛かれない子も理解できた
・実態把握を学年ですり合わせて単元攻勢を考えた
・拡大提示装置等の視聴覚機器を活用し、取り組む課題がわかりやすくなった。

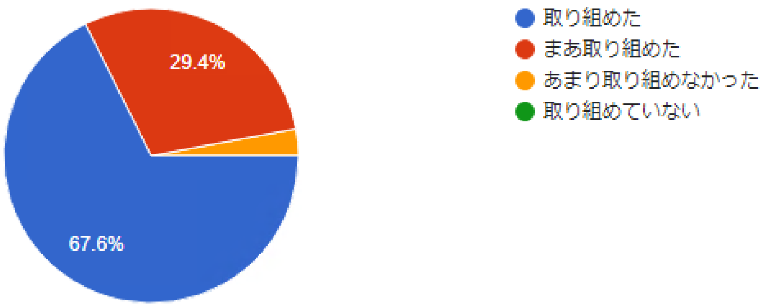
課題（29 件の回答）

・教員のユニバーサルデザインについての理解に差を埋めること。
・ユニバーサルデザインに対する理解を得ること
・教員によるユニバーサルデザインの取り組みの差が大きい

・学校全体での統一はまだ難しい。
・生徒個人個人の発達段階に応じて課題を用意することは難しい。
・多様な課題解決のための教材や教具の準備が大変であること
・一人一人の実態に合わせること
・児童理解を深化し、一人一人に応じた綿密な指導計画を立てることが求められる。つまずきに対する寛大さを持つことが必要。
・新しく転任された先生や新規採用者にも正しく理解してもらうには研修を行う必要がある。
・授業の構造化が十分でない場合があり、児童が見通しをもてないことがある。
・習熟度担当が各担任と情報共有するための十分な時間確保が難しい。
・まだまだ足りない部分がある。
・全校的な取り組みとなっていない。それぞれの担任の感覚的に実施している部分がまだ多い。
・各教員の力量の差
・教師が思いもしないつまずきをする児童もいる。
・時間の確保が十分できなかった
・児童理解が十分ではない学級もあった。
・施設面。ICT 環境が整っていないため、つまづいてしまう。
・掲示物の精選など、落ち着いて学習に取り組める環境整備がさらに必要だと感じる。
・わからないところを質問に来る生徒と来ない生徒との間で差がみられる。
・個々の児童に適した環境とは
・個々の生徒のつまずきの状況の把握
・教員のスキルアップのための研修が必要
・大型モニターに掲示すると、授業内容で活用できなくなる。
・支援の手立てを増やしていく
・まだまだ十分とは言えない部分がある
・想定していても、理解が難しい児童への支援
・毎時間行うことができなかった
・特になし

2　授業のねらいの明示

34 件の回答



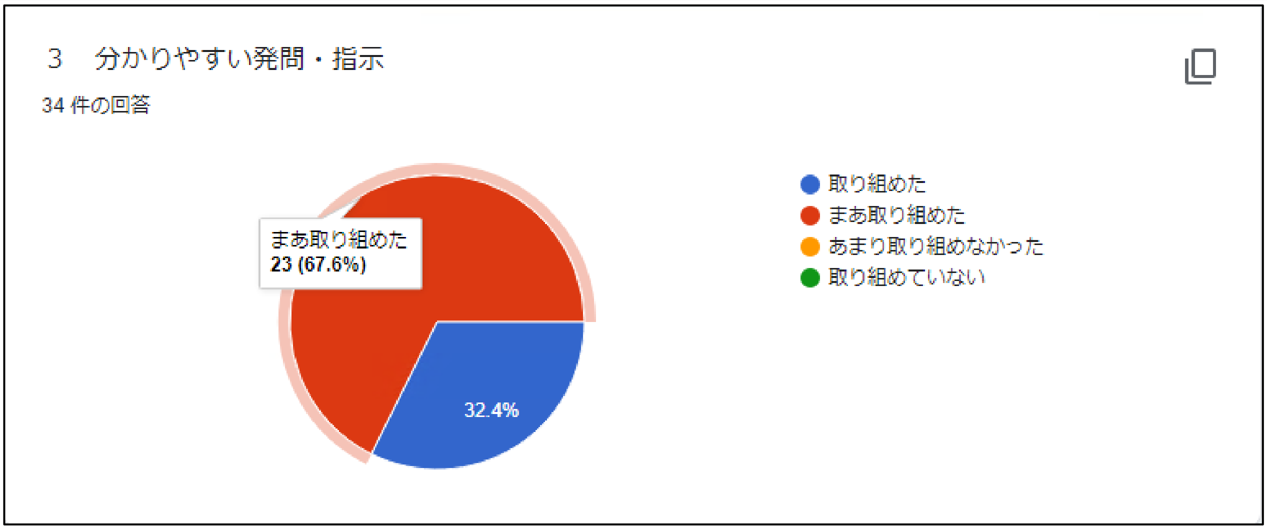
成果（30 件の回答）

・どの授業でも明確に提示している。
・板書計画の中で必ず、課題とまとめ、振り返りを入れるように指導し、実践できた。
・授業毎のねらいを明確にして生徒たちがねらいの達成感、成就感を得やすくした。 タブレットに映し出して明確化することも容易にできたので継続させていく。
・めあてを提示することで、何を学ぶ授業なのか、教師も児童も明確になった。
・課題をつかみやすい
・学校として学習過程を統一し、共通の表示を活用していることで、教員は意識して示すようになった。
・何を学ぶかを確認できていた。
・子供にも教師にもこの時間でやることの知識や技能が明確になった。見通しを持てることで学習意欲を引き出すことにもなった。
・集中がとぎれた場面でも一目で本時のねらいがわかる
・児童が一単位時間の学習について、めあてをもつことができた。また、学習の終末には、そのめあてによって振り返る力が身に付いてきた。
・授業のねらいが明確になり、いつでも再確認できる。
・どの教員も『ねらい』を明示しているので、児童に本時に何を学習するのか、伝わっている。
・校内研究を中心に共通理解を図ることができた。
・毎時間ねらいを必ず板書し、子供たちが意識できた。
・授業に見通しをもつことができる。
・ねらいをより意識できた。
・ねらいを提示することで、児童が授業のゴールイメージをもてた。
・板書の工夫で、ねらいを意識して授業ができた
・学校統一の表示方法が決まっている。
・個別指導計画の活用を通して、児童一人一人に、適切な個別指導計画を作成し、具体的な指導目標や指導内容を定め、それに基づいて個に応じた指導を展開することができた。
・黒板に必ずねらいを提示し、授業の展開をわかりやすくしている。
・ねらいをきちんとたてることで特別支援の児童が理解しやすくなった
・板書等で授業のねらいを明示したことで、生徒一人ひとりが授業に取り組みやすくなり、授業への集中力が生まれた。
・授業のゴールが見えるため、児童が見通しを持って取り組めるようになった。
・児童が1時間で何を学ぶか見通しがもてた。
・黒板等への提示の定着
・全校的に共通理解されている
・１時間の中で学習が逸れてしまっても、児童がねらいに戻って確かめられる
・毎時間の授業の型を統一し、ねらいの提示を行った。
・授業の最後にねらいにそって学習の振り返りやまとめができる児童が増えた

課題（27 件の回答）

・ねらいについて、学習の最後に確実にまとめること。

・学習計画も掲示していくと見通しがもてると感じている。
・提示している教員は毎時間提示しているが、提示できていない教員もいるので浸透させるには研修が必要である。
・めあては提示して意識できたものの、指導と評価の一体化という点では、あと一歩であった。
・全員が主体的に取り組めるようにすること
・教員の授業力を高め、児童の学習意欲を持続させ、授業内容が深まるような授業のねらいを明示することが求められる。
・ねらいをに即した授業力の向上
・引き続きこの状況を維持することである。
・毎時間励行させること
・めあての設定とそれによる振り返りの重要性について、理解不足の教員がいる。
・板書ができない授業でのねらいの明示方法の確立
・ねらいの質の吟味が必要。
・一律的にできていない部分もある。
・本時のねらいからそれた授業展開のものもあった。
・特になかった。頻繁にめあてを意識した。
・学習項目の表示だけになっている授業がある。
・学校へのスクールソーシャルワーカーの派遣や専門家の巡回などによる重層的な学校支援体制がさらに充実するようにしていく。
・統一したねらいの表示のルール
・確実な定着には至っていない。継続的に進めていくことが必要である。
・ノート指導等による振り返りの徹底
・特に感じない
・特になし(2 件)



成果 (29 件の回答)
・特に子供の興味・関心を高めるための発問に力を入れて取り組めた。
・ねらいを教師が意識できている授業では適切な発問ができている。

・生徒全員が理解できるように発問することを意識するだけでも先生方は分かりやすい発問や指示を心掛けてきた。
・どの児童も意欲的に活動に取り組めた。
・発問がわかりやすいと、児童は主体的に学習に取り組める。
・できるだけ短く的確にすることで分かりやすくなった。
・一昨年の構内研究では、道徳を取り上げて進めた。中心となる主発問を意識して取り組んだことが財産として残っている。
・勉強の苦手な生徒も取り組める
・児童の思考が、教師の発問や指示に正対していた。
・ねらいに沿った発問を行うことにより、子どもの視点が明確になる。
・どの教員も発問や指示は、短く端的にしようとしている。できているクラスの児童は、スムーズに活動などができている。
・校内研究を通して学年によっては発問や指示の工夫も授業におけるユニバーサルデザインにつながるという提案ができた。
・１時間の授業の構造化を図り、ミニ黒板等で視覚化した。
・発達段階に応じた分かりやすい発問を工夫できた。
・教員が意識できた。
・児童が主体的に活動する姿が見られた。
・短い言葉で端的に伝えることで、学習に集中して取り組めた。
・話し合い活動や探究活動を行わせる基本であるため、教材研究のメインテーマとして教員は取り組んでいる。
・視覚的に分かりやすい掲示物を使用したり、個別に対応したりすることができた。
・研修会を行い、発問等について理解を深めた結果、生徒アンケートにおいても肯定的な回答値が上がった。
・一人一人の教員の意識が高まった
・授業のねらいを明確にしたことで、発問・提示が焦点化された。
・短い言葉で発問することで、わかり安発問が増えた。
・校内研究に合わせて、精査され、授業の質が高まった。
・ICT 機器の効果的な活用
・全教員が意識できている
・一斉指示が通りづらい児童も個別でわかりやすく指示することで学習に取り組めた
・児童のつまづきを想定し、発問の精選を行い実施できた。
・どの児童も学習に取り組むことができた

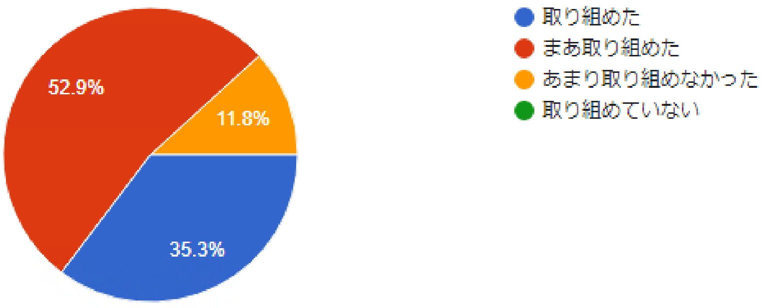
課題（26 件の回答）

・端的でわかりやすい指示を出せるようになること。
・ねらいが明確になっていない授業では、発問があいまいになっている。または、言い回しがくどくなっている。
・発問のレベルの低下を感じる教員も多く、さらに分かりやすい発問の方法を学ぶ必要がある。
・授業の狙いを的確に児童に伝える発問をすること

・教員の授業力、指導力の向上が求められる。
・子どもにとってわかりやすい発問をさらに吟味精査することが大切である。
・教材研究の時間を確保すること
・児童の思考を予め想定しきれていない発問や指示が、見受けられる。
・指示がながくなったり、子どもの思考中に指示を出してしまうこともある。
・まだまだ発問や指示がその場しのぎの教員もおり、児童が戸惑う場面も見られる。
・実際の授業の、どんな場面でどのような発問の仕方が効果的かなど、具体的な研究までにはいたっていない。
・教師の力量の差を縮めること
・毎回の授業で分かりやすい発問ができたかというとそうではない。
・場面によっては、難しさもあった。
・発問の精選が必要な授業もあった。
・工夫した授業の共有が簡単ではなかった。
・取組中で、うまく生徒に活動内容が伝えられず、効果的な話し合い活動にできないことがある。
・一人一人のニーズに合った対応ができるようにさらに工夫を凝らしていく。
・発問の工夫等、これからも研修が必要である。
・特別支援の視点で行う全教科で統一した発問、指示の在り方の検討
・足りない質問をどのように補うかが課題。
・教師の専門性などで各教科によって、ばらつきが出てしまった。
・教員の授業力向上のための研修の充実
・発問は授業の根幹であり、一朝一夕に身につくものではない。
・教員が話をしすぎてしまう。
・児童の実態によっては、難しい発問もあった。

4　学習内容等のスモールステップ化

34 件の回答

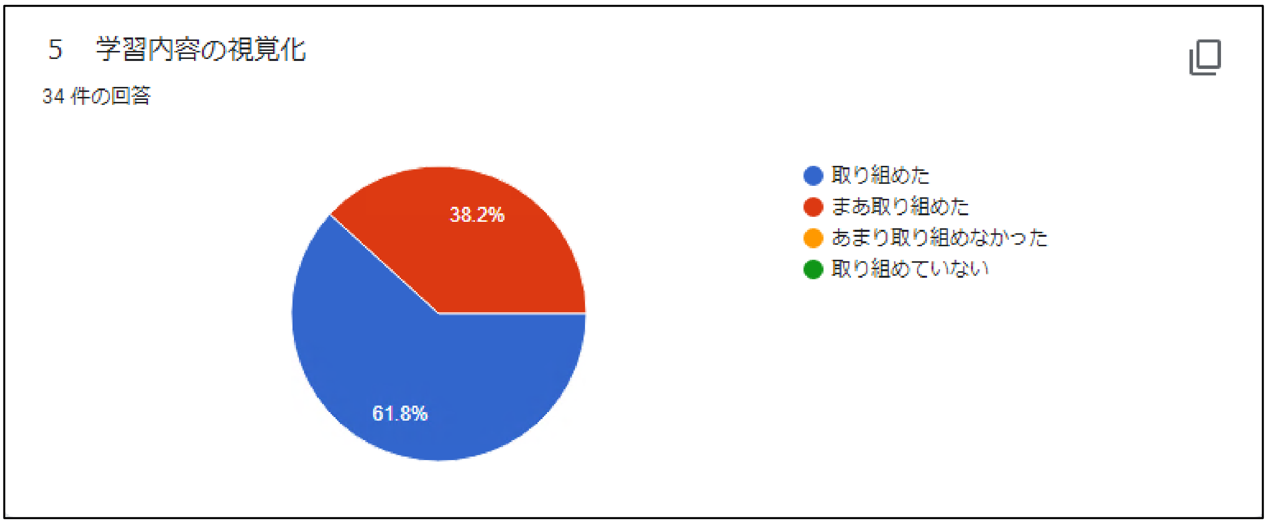


成果（27 件の回答）
・簡単→難しい　の流れで授業を進められている。
・指導の手立てや工夫が意識できている授業ではできていた。

・「発問、思考、理解、振り返り」のサイクルを授業内で確立できた教科はさらに細分化しながら分かりやすい授業を展開することができた。
・細かくステップを設けることで、達成感を味わえる場面が増えて、意欲向上につながった。
・どの子も分かる授業
・いきなりゴールを示すわけではなく、小さく区切ることで満足感が得られるようになった。
・算数では特にこのことを踏まえた指導が進められている。
・勉強の苦手な生徒にとってもついていける
・理解・技能的な分野については、おおむね満足である。
・スモールステップにすることで、達成感を味わう機会が増えた。
・経験値がある教員は、児童がつまずく場面を想定し、スモールステップで学習できるようにしている。
・子供たちの学習意欲が喚起された
・学習内容をスモールステップ化することで、できる、分かる喜びを感じさせることができた。
・うまく流れができたときは、効果的であった。
・授業に参加できなかった児童が、活動できるようになった。
・集中して最後まで授業に取り組める児童が増えた。
・特に、基礎基本の定着に利用している効果を上げている。
・一つの学習においても、一人一人に合った学習資料を準備したり、タブレットの活用を取り入れたりすることにより個別に対応することができた。
・ルーブリックを提示する中で、どのあたりまで自分ができていればいいかという思考の可視化を行った結果、授業が分かりやすいと答える生徒が増加した。
・児童の学習への理解が高まった
・学習内容をスモールステップ化したことで、生徒それぞれの理解度の差を埋めることにつながった。
・児童の実態に合わせた丁寧な授業が増えた。
・習熟度に合わせた、課題を設定して、学習意欲が持続した。
・短時間で集中して取り組む
・どの教科においても授業内、指導内容を決める上で意識をしてくれている
・児童が達成感を味わえる
・個人で取り組んだ後に、ペアやグループワークを行った。

課題（27 件の回答）
・一問一答形式の授業から脱却すること。
・教材研究がしっかりできていないときには、うまくできていないときがあった。
・授業進度が遅くなった。調整が必要。
・個に応じたスモールステップにすること
・児童理解に基づいた授業準備を十分の行うことが課題である。
・他教科にも広げていくことである。
・教員にその意識をもたせること
・経験値がなかったり、古い手法を改善しきれていない場面もある。

・スモールステップに取り組んでいたとしても、学期末には様々な教科のゴールが重複してしまう。
・まだまだどこをスモールステップにすればよいかが分からない教員がいる。
・個に応じるためには準備時間の確保が必要である。
・いくら内容をスモールステップ化しても理解まで至らない児童もいる。
・スモールステップ化の意味が十分理解できていない。
・児童の実態に合わせた授業展開とならない授業もあった。
・授業時間には限りがある。
・今年度の成果を基に、さらに充実した学習内容の精選を行っていく。
・適したステップを設定することがむずかしい
・理解度の高い生徒への指導をさらに高度化するための工夫
・丁寧に進めるがために時間がかかることがある。
・少人数算数以外は、人手が足りない。
・学習内容に応じて課題の量や質を見直す
・まだまだ改善の余地がある
・すべての教科での実現が難しい
・個人の取り組みを把握することが難しい場面もあった。
・学校全体でその良さを理解する必要がある
・特になし(2 件)

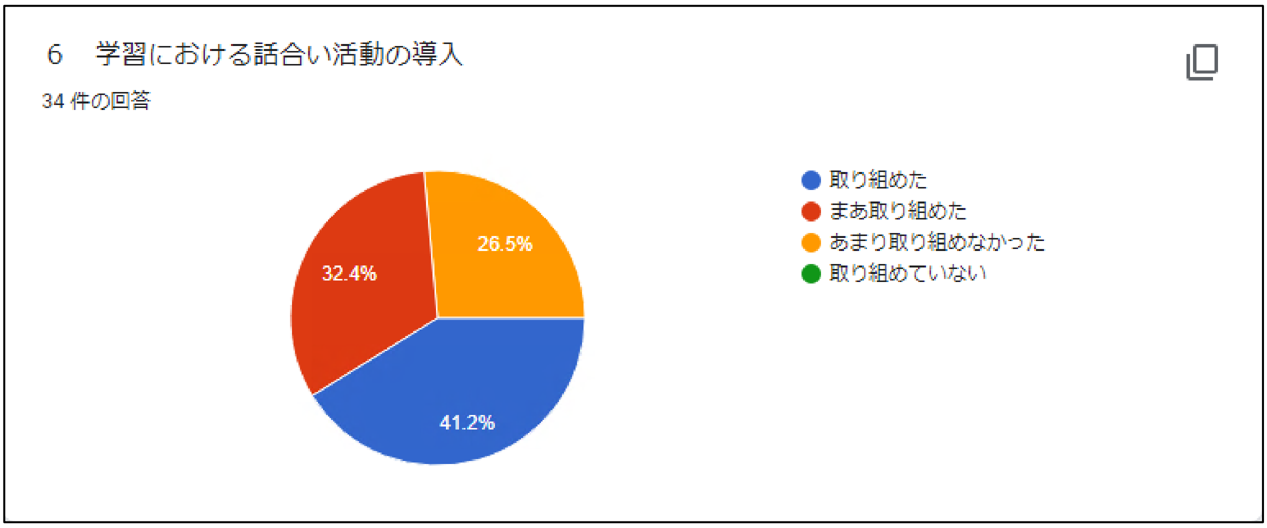


成果（30 件の回答）
・ビックパットやタブレット端末を有効に活用できた。
・児童の個々のクロームブックの活用、ビッグパッドによる視覚化は児童の学習内容の理解に大きな効果があった。
・IT の活用が広がった、自己の財産としてプレゼンテーションに力を入れる教材開発が盛んに行えた。
・ICT 機器が整備されたことにより、手軽に教材の視覚化ができるようになった。
・導入場面の意欲向上やまとめの場面での知識に定着に役立った。
・児童が理解しやすい

・大型テレビや実物投影機活用による動画、写真、挿絵など、視覚教材を増やすことで理解が進んだ。
・ICT,タブレットの有効活用
・全校で ICT の活用が進んでおり、子供たちの学習威容にもつながっている。
・勉強の苦手な生徒にとって取り組みやすくなった
・板書や ICT 機器を活用した視覚化が進んだ。
・特に、視覚情報による支援を必要とする児童にとって、理解を図る手だてとなっている。
・児童にとって見やすいチョークの色を確認した。黒板と大型提示装置を利用し、児童が理解しやすい授業展開を考えることができた。
・学年の実態に応じた ICT 教材の工夫等ができた。
・掲示物の他に大型ディスプレイやタブレットを活用できた
・ビッグパッドの活用もあり、視覚化を意識して授業構成を考えることができた。
・場面によっては、有効である。
・ICT 機器を活用したり、板書したり、本時の流れを示すことで、見通しがもてた。
・ICT を活用して、写真や動画を多用した。
・ＩＣＴ機器の活用が推進され、利用しやすくなった。
・先ほども記入したが、ICT の活用により大きく画面に資料を映し出したり、掲示物を使用したりした。
・ワークシート等の工夫を行った結果、支援が必要な生徒の反応も良くなった。
・児童の学習への意欲が高まった
・板書等で授業のねらいを明示したことで、生徒一人ひとりが授業に取り組みやすくなり、授業への集中力が生まれた。
・タブレットを使った学習が効果的であった。
・授業の流れを明示することで、見通しが立てた。
・ICT 機器の効果的な活用
・ict の活用の推進が１番大きな生活だと思われる
・視覚から情報が入ることで学習に進める児童がいる
・ICT の活用を行い、視覚的に取り組みやすい授業を展開した。
・どの児童も理解しやすかった

課題（26 件の回答）
・ICT 機器活用のバランスをとること。
・クロームブックの技能差による時間効率はここによって大きな差があった。
・教材開発の長時間化、働き方改革との両立が課題である。
・デジタル教材等のソフト面の充実
・効率的に視覚化すること
・有効な動画や写真を準備するなどし、大型テレビ、実物投影機を有効活用していくこと。
・ツールとしての ICT であることが大切であることを意識して活用すること。
・教員に対し意識を持たせること
・要配慮児童への個別的な視覚化については、今後も検討・改善していきたい。

・より多くの学びにおいて、視覚化を進めていくためには時間と工夫が必要。
・授業単元を振り替えられるような掲示物を貼れるパネルやホワイトボードなどの環境整備
・準備にかけられる時間が限られているので、本当はまだまだ活用できるはずだ。
・教材を作ったり探したりする時間が十分に確保できない。
・毎時間できていない学級もある。
・ICT 環境（ネットの接続の遅さ、ハード面など）が課題。
・ネット接続の環境が整っていない。
・今後、さらに ICT 機器の活用なども考えていく。
・全教科において工夫を行う必要がある
・板書や掲示等の工夫
・色、大きさなどアナログに頼った教材が効果的なこともあり、準備に時間がかかることがあった。
・教員研修のさらなる充実
・まだ活用の余地があり、また個人のスキルにも差がある
・聴覚優位の児童などには逆効果になり、すべての児童に適しているわけではない。
・すべての教員が行えたわけではなかった。
・特になし



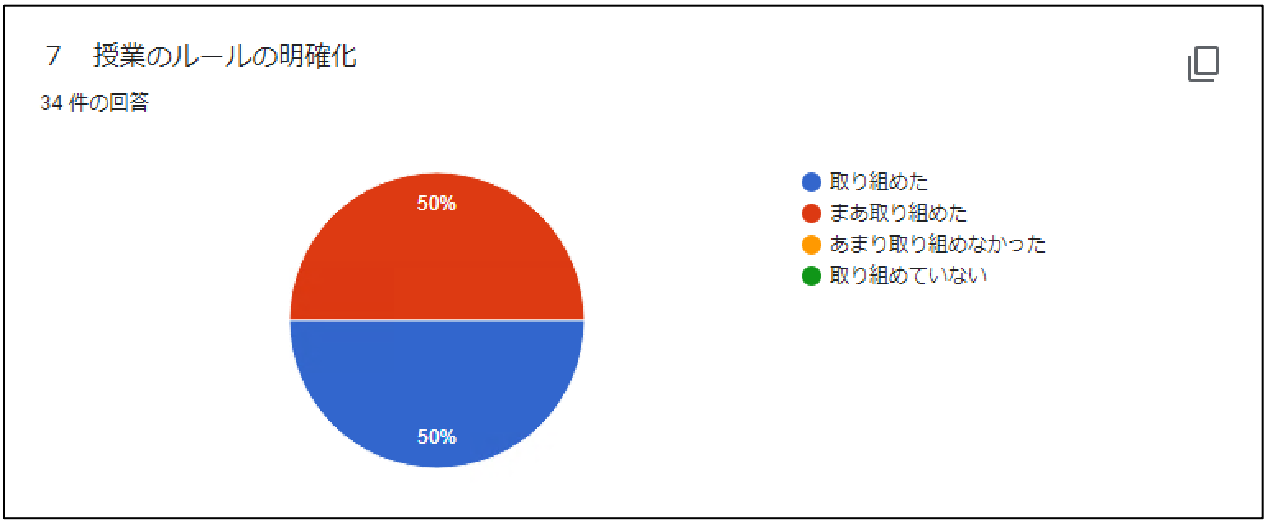
成果（27 件の回答）
・隣の子供同士の話し合い活動に取り組めた。
・課題に対する話し合いだけでなく、自分の考えをジャムボードなどに貼りつけ、他の人の考えと比較しながらの話し合い活動ができるようになってきた。
・ジャムボードを積極的に活用することで、普段の話し合い活動よりも活発に意見が出るようになった。
・話し合い活動により、自分の考えが広がったり深まったりした。
・ホワイトボード 7 や ICT を活用して学びあいができた。
・学習活動の中に意図的に学び合いの時間を設定し学習を広げたり深めたりするようにしている。

・一人１台の多ブレッド端末を使うことで学習方法に広がりが見られた。付箋機能を活用した学び合いが見られた。
・生徒が主体的に学習に取り組める
・算数科校内研究により、児童による比較・検討場面（絵や図等を活用した算数的な話し合い活動）を取り上げた研究授業や教員ミニ研修を重ねることができた。
・コロナ禍にとり、制限されてきたが、年度後半に工夫して取り組み、対話的な学びの機会を設け、この学びの関連付けを行った。
・児童が、なるべくいろいろなことを発言できる雰囲気づくりを心がけた。
・校内研究を活用して、対話的な学びについて理解、実践を進めることができた。
・隣の児童との意見交換を行い、授業に活用した。
・思考を深めたり、再確認したりすることができた。
・話合い活動を取り入れて、多面的多角的な意見をもてた。
・グーグルジャムボードを活用し、話し合う力を高めた。
・生徒が主体的に学習に取り組むことができる。
・学年により難しいこともあるが、研究授業において ICT 機器を活用してのグループ学習に取り組み、役割を明確にし、一人一人が課題をもって話し合う活動を行うことができた。
・４人１組のグループ活動が定着化した
・他者の意見を聞くことで自分の意見を確認したり、さらに考え方を広げていくことに役立った。
・短い言葉ではっきりと話す」姿が見られた。
・小集団による話し合い活動は、児童の発言機会が増えるとともに、相互の細かな意見の相違に気づきやすい。
・ペアやグループ学習の定着
・意見の交流はよくできている
・他児の意見を聞くことで、自分の知識につながる
・ペアやグループ、ICT を活用した活動を行えた。
・児童が主体的になった

課題（27 件の回答）

・コロナ禍における学び合いの仕方の工夫について
・コロナの感染への配慮
・コロナ対策により、年度の前半は複数による活動は控えていた。
・コロナウイルス対策を講じながら、学び合う方法を模索すること。
・コロナ禍により、通常の話し合い活動が行いづらい。
・コロナ禍ということもあり、話し合い活動について、協議する時間をもつことができなかった。
・感染症予防のため、話し合い活動の人数、距離、時間に制限がある。
・コロナ禍であり、十分な話合い活動をすることはできなかった。
・コロナの影響もあり、表情までは把握できない。
・コロナ禍のため、話合い活動が十分行えていない。
・コロナ禍であり、グループ活動が制限された。
・コロナ禍の活動のため、十分に取り組めていない。

・コロナ対応を踏まえた活動時間の検討
・グループでの話し合い活動を行うこと。
・人対人、会話対会話でコミュニケーションすることがさらに苦手な生徒が増加する傾向
・話し合う内容の吟味と事前のグループの組み合わせを細かく設定することが必要である。
・ジャムボードを使うなど　話し合い活動の方法を工夫する
・教員に対し意識を持たせること
・知識・技能が身に付かないと「話し合いができない」あるいは「思考・判断・表現力の育成はできない」と思い込んでいる教員が、まだいる。
・タブレットリテラシーの徹底。（共有場面でのカードの動かし方のマナーなど）
・相手のことを理解することが難しい児童もいるので、支援員の力が大きな助けとなる。
・ジャムボード等の ICT 活用のスキル向上
・意見の集約から新しい課題を見出す新学習指導要領に沿った授業展開が不十分
・感染症のリスクを上げることになる。また経験年数により、リードの仕方に差がある。
・全員が均一に話し合いができるのが難しい。（全く話さない子がいるなど）
・対面活動の制限などがあった場合の話合い活動が難しかった。
・話し合いの目的を理解させる必要がある

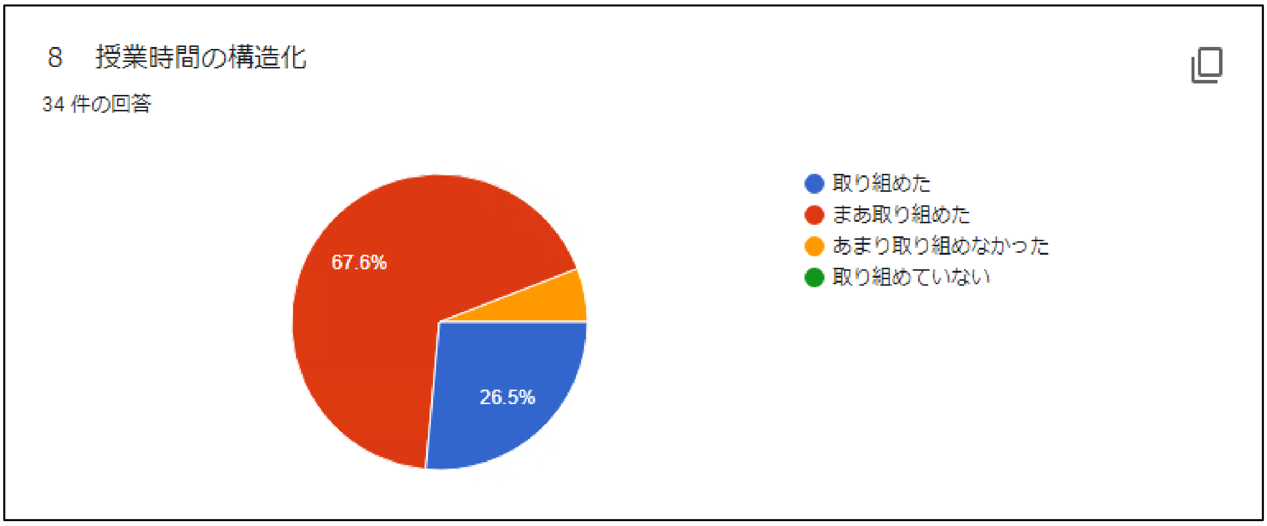


成果（30 件の回答）
・特にタブレット活用のルールは明確にできた。
・授業規律という面で、あいさつに始まり、あいさつで終わる。しっかりと話をしている人の目を見て話を聞く。など、学校全体で共有できた。
・授業毎の振り返りを行い、自己の学習効果を高めることができている。
・統一的なきまりにより安心して取り組める。
・全校で同じ基準で取り組んだ
・基本的なルールやマナーについて
・授業規律を明確にし徹底するようにすることでルーティンで子供たちが動けるようになってきた。
・落ち着いて授業に取り組めた。

・統一することで子供たちにに落ち着きが見られている。
・勉強の苦手な生徒にとって取り組みやすくなった
・クラスや学年によらず、ルールが一定なので児童が集中しやすい。
・学校のルールを周知していくことで、学校として、学びの効率化につながっている。
・教員が、校内研究の分科会でそれぞれ出し合い、ルールについて共通理解をもつことができた。
・全校での基本的なルールの統一が図られた。
・各学級ごとではあるが、授業の中でのルールを作っている。
・細かいルールは必要がないと考える。あいさつと時間、思考する場面の設定が大事。
・授業スタンダード、生活スタンダードを明確にしたことで、教員も児童も意識して活動ができた。
・ルールを明言化したり、掲示したりして分かりやすく伝えていた
・生徒は授業に前向きで、授業規律はしっかりしているので、特に必要がない。
・生活のリズムを崩さないために、毎回決められたルーテイーン作業に取り組むことにより、落ち着いて生活できるようになってきている。
・授業ルールを全学年で統一し、教員の意識が向上した。
・学習規律の定着につながった
・授業に規律が生まれ、落ち着いた雰囲気の中で授業が行われている。
・高学年になるにつけ、落ち着いた授業展開が多くみられた。
・校内で統一することで児童が守りやすくなった。
・授業パターンに児童が慣れ、安心して取り組めた
・規律は確立している
・学校で統一することで、学年が上がってもルールが変わらず自然に身につく。
・学習規律の徹底に努め、実施できた。
・授業規律がどのクラスもしっかりとできた

課題（25 件の回答）
・学習用具の準備や片付け、発言ルールなどの徹底を図ること。
・集中できる時間が短くなった時には、乱れることもあった。
・学習内容が盛りだくさんで精査しきれていない授業も散見される、授業の質の向上のため授業のスリム化をめざす必要がある。
・学校全体や中学校区で揃えられると効果がさらに高まると思う。
・クラスによっては、ルールを徹底できていない.
・全職員で指導を共有し、揃える必要がある。
・引き続き取り組んでいくこと。
・教員に対し意識を持たせること
・要配慮児童への対応については画一化できないので、臨機応変な対応力が必要である。
・異動（転入）教員や新規教員への確実な引継ぎ
・若手教員を中心に、授業のルールが、まだまだ確立されていない。
・定期的な見直しが必要。
・学校全体で統一した授業ルールはない。

・教科による違いがある。
・スタンダードを守れない児童が少人数いる。
・徹底できていない。配慮を要する児童への指導の工夫が必要。
・今後さらに生活習慣が身に付くよう継続して取り組めるようにすること。
・タブレットを学習ツールとして捉えさせる指導の工夫
・低学年はより具体的なルールを継続的に示していく必要がある。
・ルールの定着が困難な児童への手立て
・全校で統一するまでには至っていない
・個別に支援が必要な児童もいた。
・特になし



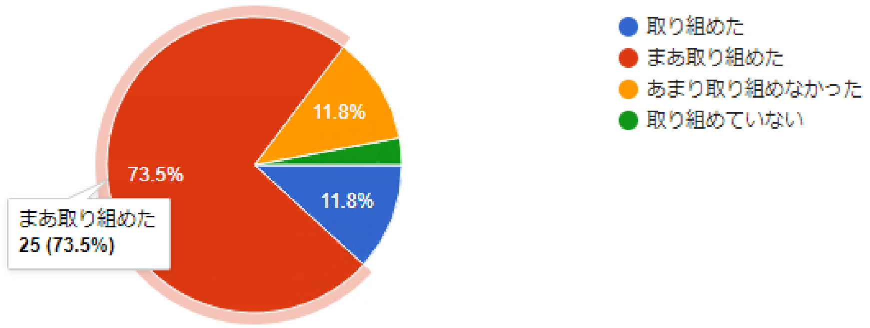
成果（27 件の回答）
・個に応じて学習の流れなどを示した。
・校内研究も含めて、児童が自ら考え、課題を解決していく問題解決的な学習を推し進められた。
・実技教科の構造化が進んだ。
・問題解決的な学習を目指して取り組んでいる。
・同じリズムで学習することで、子供が、学習に取り組みやすくなる
・道筋を立てて計画することで子供たちがわかりやすくなった。
・臨機応変に対応することができている。
・勉強の苦手な生徒にとって取り組みやすくなった
・音楽・図工・体育などは、教科の特性上、どのクラスでも授業の構造化がなされている。
・子どもが主体的に学びやすくなる。
・校内研究を中心に、各教科の授業スタイルが共通理解されつつある。
・授業単元の学習計画などで１時間ごとの見通しを持たせることができた。
・授業に見通しをもつことができてよかった。
・教科や場面により異なる。
・今することが明確になり、活動の予測がついた。
・構造化された授業の組み立てはできていた。
・話し合い活動や探究活動を授業に取り入れるために、授業デザインは必須である。

・一日の授業の流れを明確にすることで、一日の見通しをもたせることができた。
・導入・展開・まとめのサイクルをどの教科でも導入し、生徒の授業への取り組みがよくなった。
・生徒一人ひとりが見通しを立てて授業を受けられるようになったことで、生徒の間に安心感が生まれるようになった。
・授業の流れをパターン化することで、児童が見通しを持って取り組めるようになってきた。
・校内研究を中心として、授業力が高まっている
・構造化への意識が高まった
・授業の組み立ての中に構造を意識している教員もいる
・授業にメリハリがもてる
・学年で話合い」、授業の展開を確認し、実施した。
・児童が飽きずに学習に取り組めた

課題（25 件の回答）
・どの学級でも徹底すること。
・単元によってどうしても教師主導型の授業になってしまうこともまだある。
・実技教科での構造化の取り組みは進んだ。それ以外の教科では教科の独自性のため難しいと感じる先生が多い
・学習内容によっては、児童の実態も踏まえて、弾力的な運用も必要である。
・授業内容によっては、構造化しにくい。
・視覚的にも訴えるようなものを今後考えていきたい。
・教員に対し意識を持たせること
・他の教科・領域等でも、構造化を意識した授業がなぜ必要なのか、全教員の共通理解・共通実践が必要である。
・特別支援学級は毎日行っているが、通常の学級では、さらに推進していく必要がある。
・まだまだ全職員まで確立はされていない。
・教員間の力量差
・毎回の授業で同じ構造で行えたわけではない。
・指導者が意識できていないときもある。
・できていない学級もある。
・授業のルールが徹底できていないと組み立て通りにいかなくなる。
・急遽時間の変更をすることに対応しきれない児童もいるのでそこは工夫が必要になってくる。
・授業内容が形骸化の解消
・強化、単元によって偏りが出ることがある。
・国語科以外が不十分である。
・教員の授業力向上ための研修
・まだそのレベルに達していない教員もいる
・教員によって違いがある。
・若手の教員への OJT を行う必要性を感じた。
・特に感じない。
・特になし

9　分からない・できないの発信

34 件の回答



成果（26 件の回答）

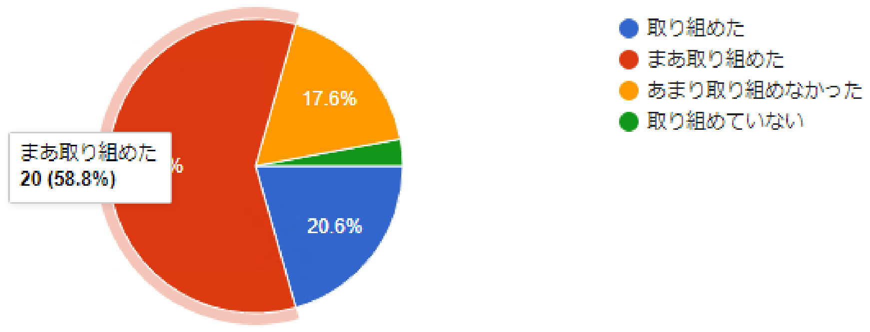
・教師が問いかけることはできていた。
・児童へ対する机間指導を意識する、学習の振り返りを必ず行うなどして児童の見取りをしっかりと行えていた。
・分からないことを認めることによって、他の生徒も素直にできないと発信することが容易になったという意見もあった
・少人数指導や、支援員の配置により、分からない児童に対応できた。
・分からない・できないことを自由に発信できるような雰囲気を大切にする学級経営を推進している。
・支援員を授業に活用することで目が行き届く
・形成的に評価して子供の学習状況を確認している授業が散見されている。
・勉強の苦手な生徒にとって取り組みやすくなった
・校内研究授業で、複数の講師が「分からない、できない」発信も一つの大切なレスポンスと強調されていたことを、全教員で共有できた。
・児童の迷いを先送りせずに済む。
・学級開きに、いつでも「分からない・できない」を発しても良いことを伝え、どの教員も児童に耳を傾け、発信を捉えるようにしている。
・学習の振り返りを書くことで、個々の理解感を知ることができた。
・分からないことをそのままにしないよう指導できた。
・話し合い活動により、質問しやすい環境ができた。
・ハンドサインなどで見とることができた。
・様々な方法で、発信の機会を与えていた。
・ワークシートの確認等、個人的な指導・把握を行っている。
・分からない・できないということを前提に複数の教員が対応し、個別に対応することができた。
・分からない・できないの発信を肯定的に受け止められるようになったことにより、生徒間の信頼関係の構築につながった。
・ヒントカード、ヘルプカードなどの教材の工夫が見られた。
・学習集団の人権感覚が向上し、意見交流がしやすくなった。

・様々なサイン（意思表示）を使用できてきた
・授業内に教員からの働きかけが散見されている
・学習のつまづきをその場で確認できる
・ノートや授業中の取り組みを把握し、次時の授業へつなげた。
・児童アンケートでよい結果になった

課題（26 件の回答）
・子供のほうからの発信できるようにすること。
・担任一人では全てを把握することが難しいことが授業によってはあった。
・学び続けるうえで、分からないことが分かるようにしていきたいが、全てが分からない、分からないことが多い場合の対応が難しい。
・どの児童も発信できる雰囲気づくりに努めていく
・分からないことを先生に聞いて頑張ろうという意欲を育てるのが難しい
・できない子が発信しにくい場合もあるので発信方法を検討していきたい。
・支援員がいないときの工夫
・今後も取り組んでいくことである。
・教員に対し意識を持たせること
・「分からない」発信後の手立てについて、想定できていない場面がまだある。
・児童によっては、発信できない児童もいると考えられる。
・授業を進めようとするあまり、ときには、児童の発信に気づかず、後になって訴えを聞くこともある。
・分からないと言える人間関係や雰囲気を作るための学級経緯、専科経営
・各学級に数名は、分からない、できないことの発信をすることができない児童がいる。
・考えずにすぐに聞いてしまう傾向もある。
・学校で共通した方法が取られていない。
・分からないことに困っていない児童への取り組み
・何に困っていて、何ができないのかを教師側が理解していくことが必要になってくる。
・生徒によって差がある
・発信できる場面設定、ツールの活用
・若手の教員の対応の仕方に課題がある。
・個々の性格にもよるので、苦手な児童もまだいる。
・さらなるサインを工夫して使用していく
・生徒の方が発信する習慣が身についていない
・自分から発信できない子への支援
・なかなか言い出せない子への見取りが難しい場面があった。

１０　ユニバーサルデザインに基づく指導と学級づくりに対するクラス内の理解促進

34 件の回答



成果（26 件の回答）

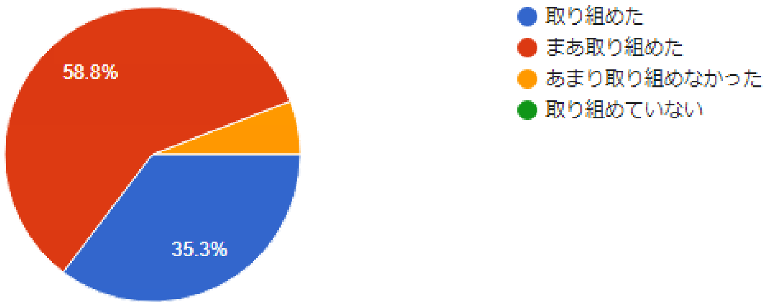
- 子供への理解が進んできた。
- 担任による「くん」「さん」付けなど、誰もが平等な意識を持てる学級づくりを行ってきた。
- 表示物を明確にすることで、教室内に落ち着きが生まれた。
- 教室前面には掲示物を貼らないなど、全校でできる取組を推進しており、集中が続くようになっている。
- 誰もが分かる授業づくりに取り組めた
- 児童が互いに認め合い理解し合う指導を大切にする学級づくりを行っている。
- 勉強の苦手な生徒にとって取り組みやすくなった
- 学年内での課題解決に向けた話し合いとそれに基づく取組が、よくなされていた。
- 教員が行うことで、子どもたちの意識付けにもつながっていく。
- 児童と一緒に、それぞれどの児童も大切にしていく学級づくりをしている教員が多い。
- 授業におけるユニバーサルデザインが大まかにどのようなものかを確認する時間がとれた。
- 個別のニーズに応じた指導があることを周知している。
- 自然に取り組むことができていた。
- 道徳の授業等で取り組んでいる。
- 失敗に過剰に反応する児童もいるので、失敗してもみんなで声を掛け合える雰囲気づくりを大切にした。
- 教員だけでなく児童の意識が高まった
- 掲示物等を通してお互いの考え方が分かり合えた。
- 誰にとってもわかる授業を意識して指導に当たれるようになってきた。
- 学級集団には様々な人がいることが周知され、学級経営が安定した。
- コロナ対応もあり、児童自身が慎重に活動している。
- 様々な合理的配慮を問題なく学級内で実施できている
- お互いの意見を認め合い、意見が増え活気のあるクラスになった
- 今年度の研究が UD であったため、どのクラスでも実践できた。
- どの児童も参加できるようになった

・質問の意図・意味がよくわからない。クラス内の理解促進とは何のことなのか、わからないので回答できない。
・質問の意味が不明。

課題（21 件の回答）
・教師の意識の差を埋めて、子供の意識の差を埋めること。
・児童間で他を思いやったり、認め合ったりする意識をさらに高めていく必要がある。
・掲示物を作成する時間が多くなった
・基本は、学校全体で取り組めたが、まだクラスに差がある。
・教員が全教育活動を通して、ユニバーサルデザインを手立てとして児童が互いに理解し合う学級経営力を向上させることが、求められる。
・教員に対し意識を持たせること
・学年を超え、専科も含めた全体での共有時間が、週に１回程度しか取れていない。
・子どもたち自身がユニバーサルデザインを意識しているかは不明。
・若手教員などの中には、まだまだクラス全体の理解指導が足りていない。
・中には理解できない児童もいる。
・環境整備や特別支援の理解についてのことでしょう。
・個々の課題の違いが大きすぎる点
・高学年児童が下学年児童のお世話をしたり、ペアで学習に取り組んだりできるようなことも取り入れていく。
・クラスによって掲示物等の差がある
・教職員のユニバーサルデザインに関する共通理解
・できそうなことから進めてきたが、まだ、十分ではない。
・感染状況等に応じた活動の広がりを検討
・教職員個人の温度差が大きく、学校全体としての線引きができていない
・教員によって変わってしまう
・特になし

１１　教室内の整理整頓

34 件の回答



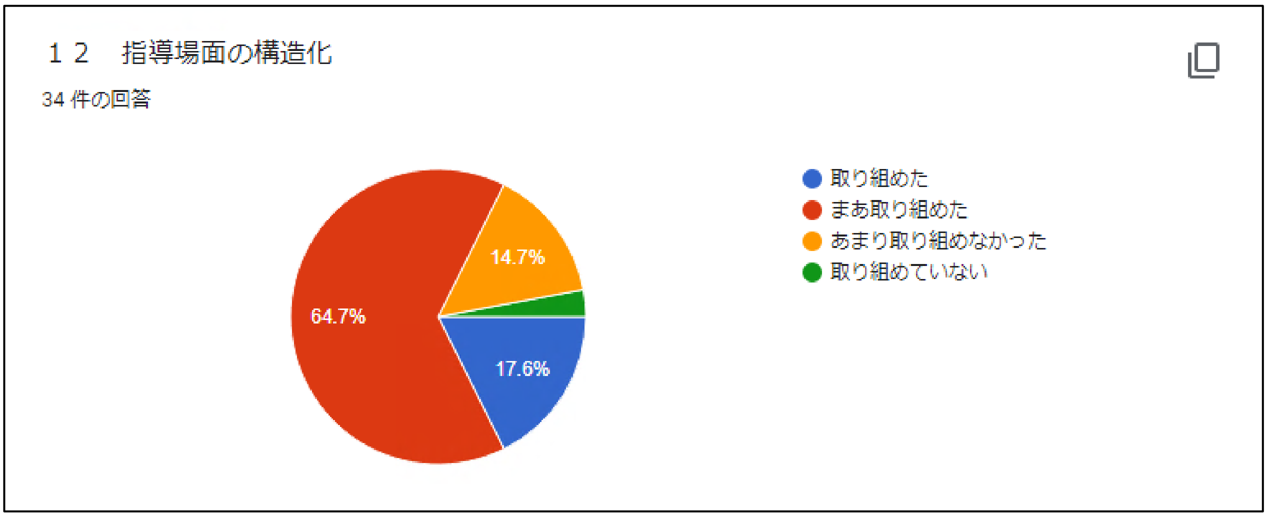
成果（28 件の回答）

・掲示板やロッカーなどの整理はできている。
・教室内の整理だけでなく、トイレや廊下なども意識して整然としてきた。
・今年はロッカーを中心に取り組み日ごろから整理整頓を意識できる生徒が増えた
・掃除道具の整理整頓により、活動がより良いものとなった。
・掲示物や掲示板の配置
・都度、必要なもの以外は持ってこないように指導し、すっきりしている。
・学校全体の美化意識が高まった。
・落ち着いた環境につながる。
・生徒にとって安心して学校生活を送ることができた
・まずは児童による身近な整理整頓について重点を置いて取り組めた。次に、係・当番活動を活用して取り組めた。
・子どもたちの注意散漫を防止できる。
・児童が学習に向かいやすくなるように、教室の全面は、整頓されている。
・夏季休業中に校舎の引っ越しもあり、整理整頓ができた。
・学校の環境によります。本校は、広いですから。
・どこに何があるかわかりやすくなるので、思考が整理された。
・掲示物等、シンプルでわかりやすいものを年間で続けることができた。
・黒板近くにいろいろな掲示物を貼らない等の配慮は、当たり前に行われている。
・写真や言葉で書かれた掲示物を使用し、どこに片づけたらよいのか分かるようにした。
・委員会を中心に整理整頓を心掛けるようになった
・児童が学習に落ち着いて取り組めるようになった
・教室内の整理整頓を行ったことで学習内容の視覚化につなげることができた。
・教室の掲示物に工夫が見られた。
・個々の特性に応じた指導ができ、その他を容認する雰囲気が出た。
・落ち着いて生活している。
・翌朝投稿した生徒たちがリセットされた状態を保てている
・不要なものを除くことで集中できる
・UD の研究でも教室環境にスポットを当てているので、実践できていた。
・集中力が高まった

課題（24 件の回答）

・整理整頓が苦手な子供への指導。
・意識していない時期には、乱雑になることがあった。
・ロッカーの整理整頓だけでなく、机の中も今後は整理する必要がある。
・整理整頓がなされていない教室については管理職が校内巡視する中で指導していく。
・整理整頓が持続できていないクラスもある。
・新校舎移転に伴う環境整備
・教室のロッカーや棚が少ないので、収納に苦労しているが、こまめに持ち物の管理について児童への指導を継続する必要がある。

・維持すること。
・教員に対し意識を持たせること
・コロナ禍のための密回避により、部分的な取り組みを重ねていくしかなかった。
・教員により差がある。
・教室の棚収納など限界があるので、難しい。
・収納スペースが少なく、整理整頓できない箇所もある。
・生徒の荷物がどんどん増えてきている。根本的な問題だと思います。
・常に声掛けが必要
・児童自身が意識できるように指導することが不十分
・個別に対応しなければならない児童への対応を考えていかなければならない。
・学級担任の意識の差による教室環境の違い。
・作品や活動の様子がわかるものを掲示する場所が少ない。〈前目、前側面には張貼らないため〉
・ICT 機器等、物品が増えることで教室内の空間の利用を工夫する必要がある
・掲示物の取り扱いがまちまちである
・教員によって変わってしまう
・特になし



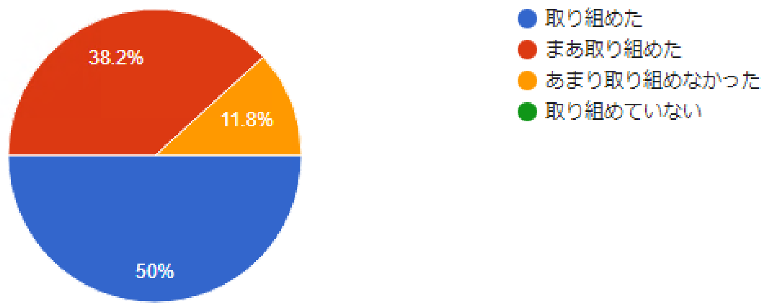
成果（22 件の回答）
・学習内容が明確になるよう、指示を出していた。
・問題解決型の学習を行っていくことで、指導の順序性や効率的な指導法が意識できてきた。
・ある行動に対する指導において構造化は生徒にも理解が深まることができた。
・学習活動に応じて最適な指導を選択して授業を進めている
・ねらいを達成するための活動を工夫している
・都度、有効な支援指導をしてきている。
・複数で対応したり組織的に活動したりすることができている。
・勉強の苦手な生徒にとって取り組みやすくなった
・低学年では、支援員やタブレット PC を活用したりした。中・高学年では、習熟度別指導やタブレット PC、手立てカードなどを活用した。

・校内研究の中で、共通理解を図った。
・授業観察等で構造化された授業について互いに見合えた。
・発達障害等ある場合、伝え方や指導時間等、配慮をしている。
・机の配置や、どの児童とペアを組むとよいのかなど考え指導場面に生かすことができた。
・生徒個々のアセスメント、その生徒の対応の共通理解が校内委員会で共有されている。
・１単元、１単位時間の時間配分や活動内容がわかりやすい授業が出てきた。
・研究教科は教材分析も進み、論理的に構築することができた。
・構造化への理解が深まった
・授業観察をしてみると、独自のスタイルと絡めて、ある程度のパターン化がされているように感じられる。
・メリハリがもてる
・学年全体で確認し合い、指導構成を考えた。
・授業のユニバーサルデザイン化がすすんだ
・質問の意味が不明。

課題（20 件の回答）
・複数の指示を出さないようにさせること。
・全ての教員、全ての授業でできていないのが現状
・様々な指導の場面において構造化は大切であるが、どのレベルで構造化するかによって、複雑化する恐れがある。
・山場を作り、児童にねらいとする資質能力を育てる構造とすること
・様々な児童の言動や行動に対して、臨機応変な対応が求められる。
・OJT で共有できるようにする
・維持すること。
・教員に対し意識を持たせること
・化学年の積み残しなど、児童一人一人のニーズには応えられていない。
・具体的な場面に出会わないと、イメージがわかず難しいところがある。
・指導場面とはどこの部分でしょうか。
・コロナのため、指導形態が限定された
・さらに作業に集中しており組める空間を提供できるよう考えていく。
・生徒個々のアセスメントの充実
・具体的にどのように進めるかの共通理解が浅い。
・他教科が検討する余裕がなかった。
・教職員研修の充実
・教科によってはやりづらさもある。限られた時間内に指導内容を教える辺りが限界の教科もあるようだ。
・すべての教員が行えているかわからない。
・若手指導に OJT の必要性を感じた

１３　刺激量の調整（例、黒板周辺の掲示物を無くしたり、棚の物が見えないようにカーテンで隠したりするなど）

34 件の回答



成果（26 件の回答）

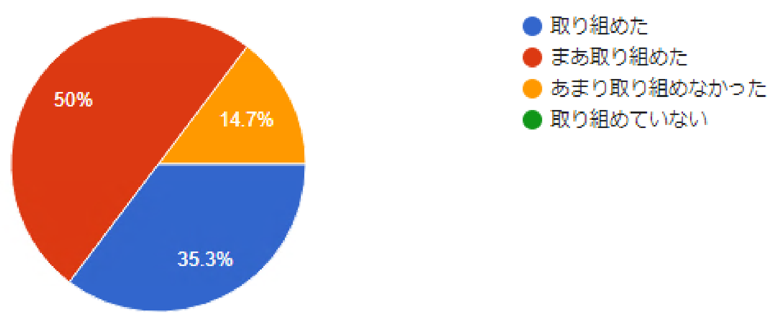
・全体で意識できた。
・落ち着きがみられてきた。
・掲示物の色を原色系よりも暖色系などを取り入れて、教室全体が落ち着いた。
・授業への集中力向上
・黒板周りをすっきりさせ、集中できるようにした
・仮設校舎で実施
・年度の初めに特別支援委員会からの提案で、全校で共通理解し統一した。
・落ち着いた教室環境になっている。　全クラスで取り組んでいる
・学校全体に統一感がある。
・勉強の苦手な生徒にとって取り組みやすくなった
・音による刺激の調節については、おおむね満足の状況である。
・どの教員も意識して取り組んだ。
・どのような実践例があるか確認する時間を取ることはできた。
・支援レベル１の手立てとしており、各学級担任が調整している。
・例年四月に確認しています。
・特別支援教室では徹底できた。
・常識として実施されている。
・黒板には、必要なものだけ掲示し、児童の気が散ってしまうものなどは置かないようにした。
・授業への集中力の向上につながった。
・黒板やモニターに集中して活動できた。
・児童が落ち着いて授業に取り組めた。
・教室前面の掲示を最小限にすることで、刺激の調整が校内で共通理解されている
・取り組めている学級もある。
・児童が必要な情報のみをキャッチできる
・UD の観点で教室環境を考え実践できた。
・集中力が上がった

課題 (23 件の回答)

・教師による意識の差を埋めること。
・前面だけでなく、教室内全てで意識していく必要がある。
・刺激物を排除することも大切だが、調整することに困難さを感じた。刺激物を意識しなくなったなあと感じた数週間後に思い出してパニックになってしまった。
・新校舎でのさらなる取り組みを設計の方とも連携して行う
・定期的に、環境整備をしていく必要がある。不必要なブラウン管テレビを処分する必要がある。
・維持すること。
・教員に対し意識を持たせること
・学習の支えにもなるため、極力、教室サイドや後方の壁に掲示物を貼っている。
・担任により実施に差がある。
・全ての調整ができているとはいえない。
・継続すること。普通にできること。
・黒板に授業以外のことが書かれていることがある。
・インクルーシブとしての視点として、通常学級には浸透していないところもある。
・学校で、統一した掲示物の掲示の仕方等を考えていく必要がある。
・クラスによって差がある
・ユニバーサルデザインに対する理解促進
・掲示物和春場所がなくなる。
・ICT 機器等が刺激にならないよう配置を工夫する
・必要性を感じない教職員もいる。ただし整頓はされているので、どこまで求めていくかが課題だ。
・特になし(2 件)

１４　各学年・各学級等における教室環境の共通化

34 件の回答



成果 (25 件の回答)

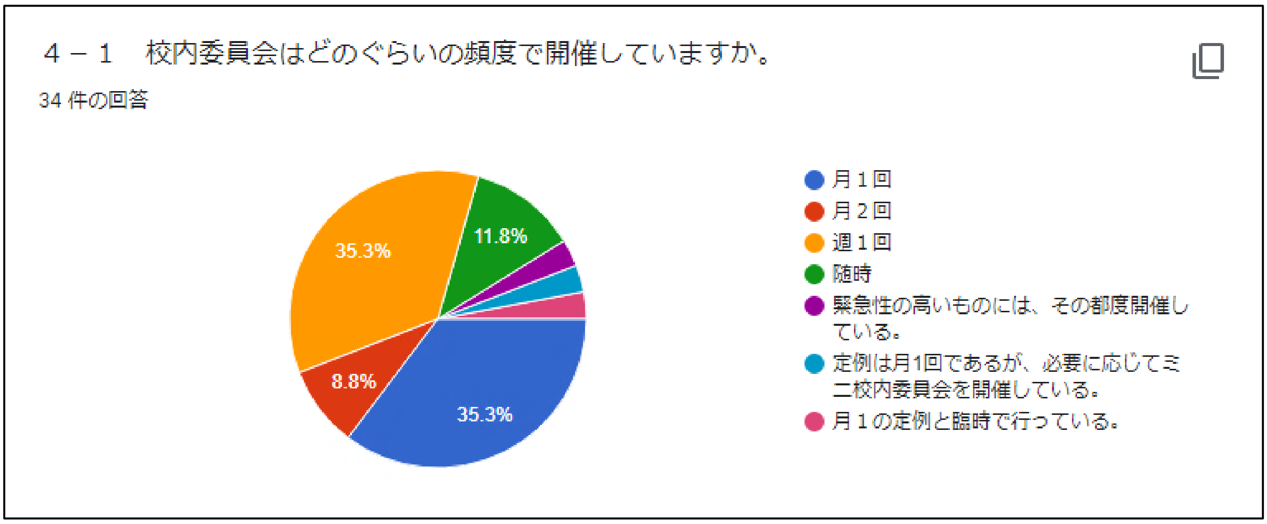
・学年でおおよそそろえることはできている。
・学年内で掲示物だけでなく、指導の内容、進捗も合わせられた。
・教室内の平準化が見られ落ち着いた様子ではある。

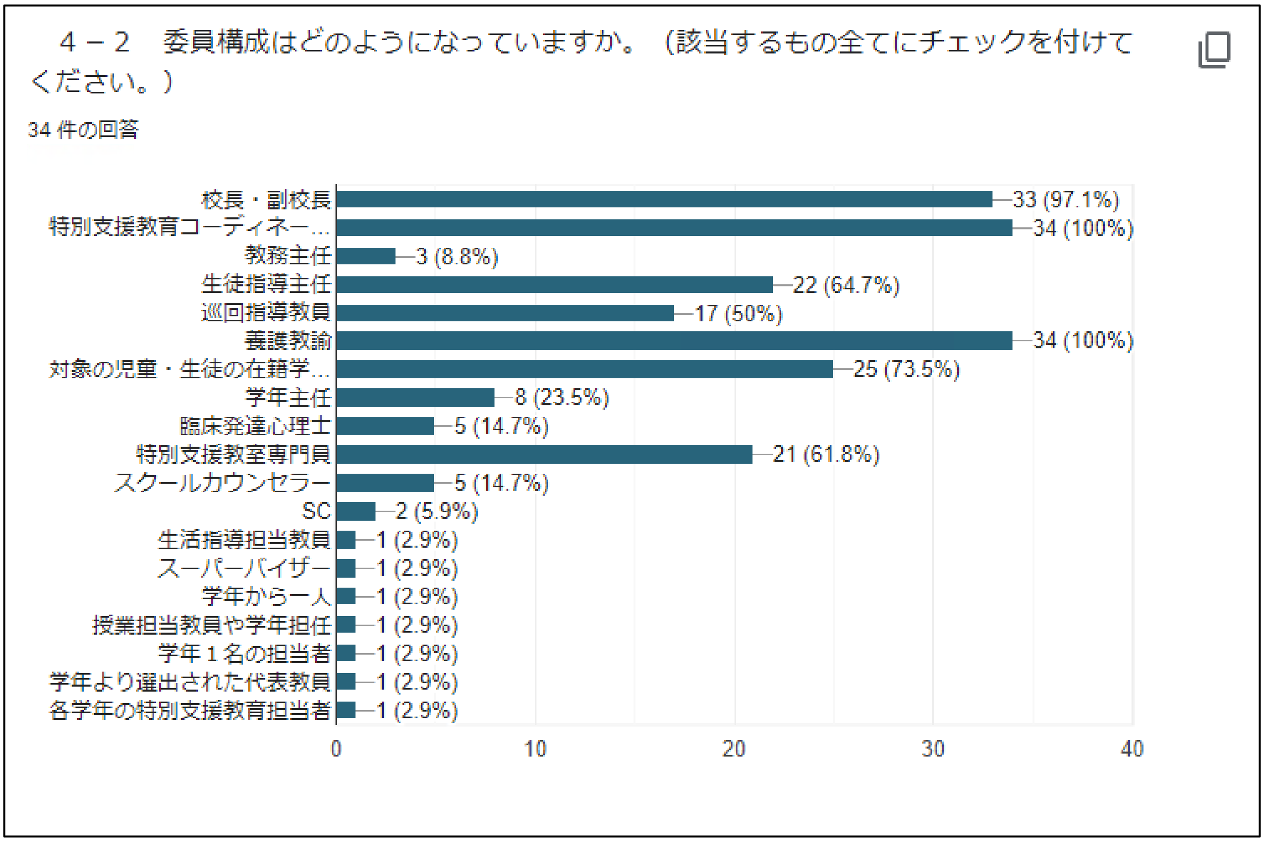
・安心して学習や生活ができる
・研究推進部を中心に取り組むことができた。
・全学年で統一できている。
・学校全体で共通した整理整頓仕方を生活指導部から出している。
・掲示物も含め学年で統一感がある。
・勉強の苦手な生徒にとって取り組みやすくなった
・発達段階に応じて、廊下・教室掲示について、ほぼ取り組めた。
・各学級担任の情報共有にもつながる
・学年会などで、共通化を図っている。
・最低限の共通化は図っている。
・通級指導教室の教員が、研修を開いて周知した。
・校舎の基本構造が共通性がある。
・あまり取り組めなかったので、課題として取り組んでいく。
・各学年で掲示物の共通化を図った
・学校全体の落ち着いた雰囲気につながった。
・学年でおよその統一はできた。
・情報発信を積極的に行うことで、他の実践を取り入れる機会が増えた。
・少人数指導等でも、児童が戸惑うことなく学習に取り組む
・市の方針により、投影機が共通して使えていることと、黒板の左端に、「この時間のめあて」と「この時間の展開」が共通して明記されている。
・どの教室えも同じ指導方法っで授業ができる
・学年で話合い実践できた。
・どの学級に行っても同じ環境で学習できるようになった

課題（19 件の回答）
・学校全体での共通化（できることを見出す）こと。
・教師の個性が発揮できない。
・担任の特色などを少しでも生かせるような工夫がこれからは必要である。
・共通化したほうが良いことを全体で再確認する必要がある。
・定期的に、整備し改善する。
・維持すること。
・教員に対し意識を持たせること
・学年間については、発達段階の違いや学年特性もあるため、重点を置くことができていない。
・増築などで、棚の位置や黒板を様式など異なる場合があり、全てに共通化を図ることは難しい。
・各学級担任が、児童の実態に応じて環境を整えているので。
・構造的に難しさがあるのでは。また、一律的もよくない。学級の個性も必要。
・徹底はされていない。
・先ほども記入したが、どの教室も共通した掲示物の掲示の仕方などを考えていく。
・ユニバーサルデザインに基づいた教室環境の整備
・更新し続ける必要がある。

・学年間の更なる共通理解
・やはり徹底の度合いには差が出ている。
・特になし

問４　特別支援教育に関する校内委員会について伺います。





４－３　校内委員会で検討する内容はどのようなものがありますか。（32 件の回答）

・児童の実態と適切な支援。保護者への連絡。
・特別支援教室入退級に関して、個別指導の対象者に関して、各学年で配慮が必要な児童の情報交換など
・生徒個々の１週間の様子（校内、家庭内問わず）

・支援を必要とする児童の状況を踏まえた支援方法や体制の検討
・児童の状況の共通理解と、適した指導について
・特別支援の具体的な取り組み及び情報共有
・支援の仕方について
・生徒の一週間の様子、SC・専門員・巡回教諭・コーディネーターからの報告、支援方法の検討
・情報共有・支援レベルの検討・今後の支援方針の確認
・生徒の情報交換
・特別支援教室通室に向けて
・通室児童及び要配慮児童への個別的な指導や支援
・ケース会議について
・特別支援学級転級に向けて
・教室環境及び授業面の支援について
・特別支援教室で支援が必要かどうか。また、その他の支援の方法
・レベル検討・特別支援教室の入退室検討・課題がある児童の支援方法の検討・児童の情報交換
・通室の入退級。課題のある児童への組織的な対応をどうするかの協議。
・対応の仕方、支援教室入退室申請の協議、転学等の支援についての協議　など
・外部機関へつなげる
・巡回相談、対応方法、不登校の要因、家庭の課題、関係機関との連携
・支援が必要と思われる生徒の継続的な情報交換。具体的な指導法王の検討。他機関との連携の検討。
・生活指導上の事案、特別支援に関わる事案
・個別指導計画の作成の仕方、通級入級児童の検討、いじめ案件の会議など
・特別支援教室での指導内容、ＳＣとの情報交換、支援方法の検討
・友達との関りにおいて課題のある児童についてや外部機関とのつながりを考えた方がよい児童についてなど。課題のある児童についての情報共有
・通室している生徒の状況、支援が必要な生徒の情報共有
・配慮を要する児童　通級への検討
・課題のある生徒の情報共有、対応についての確認
・課題がある児童の実態把握、具体的な支援方法、支援員の活用方法など
・情報共有・組織的支援の必要性の精査
・個別の配慮を要する児童のついての共通理解
・生活指導上の課題、特別支援教室の入室に関する場合、特別支援の方法等
・特別支援教室入退室の検討。学級内で困り感のある児童の共有、支援方法の協議など。
・特別な支援が必要な児童の情報交換
・不登校児童に関して・特別な支援を要する児童について支援の在り方

４－４　校内委員会の充実のために工夫していることや成果は何ですか。（31 件の回答）

・生活指導夕会（週１回）の充実、学年会（週１回）での連絡・報告・相談
・特別支援コーディネーターが会の円滑な進行を考慮し、事前に下打ち合わせをおこなっていた。

・生徒個々が学校以外の組織とどのくらいかかわっているのかを明確にしながら様々な支援の方法を模索することができている。
・事前に教務主任が、支援を要する児童についての状況（概要）を取りまとめ、本題に入りやすくしている。
・たくさんの目による児童理解によるより深い理解
・具体的な指導方針の決定
・日頃から様子をこまめに聞いて、先手先手に動くこと　児童の困り感を見逃さない。
・支援委員会以外の教職員への情報共有の充実
・コーディネータを中心にアンテナを張り、担任が一人で抱え込まないようにしている。多くの教員の目で一人一人の児童に必要な支援を考えるようにしている。
・資料作成、職員間周知
・低・中・高学年及び養護教諭の4名を特別支援コーディネーターに指名し、構造化を図っている。３年目になり、要配慮児童への支援・家庭への支援・保護者対応・たっちとの連携等に効率的に活用できている。
・特別支援教室教員との連携
・校内委員会の前に必ずコーディネーター会を開き、児童の情報を収集し検討内容を精選している。
・月例の他に臨時開催も必要に応じて行う。
・話し合われた内容が全教員にも周知できるようにする。外部の意見も参考にする。
・記録を回覧し情報共有する
・学年ごとに、対象生徒の記録をとっている。
・コーディネーターを通常級の教員と支援学級の教員2名で参加している。
・必要な時にすぐ実施すること。
・通級指導教室と固定級の両方の拠点校のため、専門的な見識で進められた。
・会議資料の記入方法の工夫や生徒の状況の把握方法
・限られた時間の中での開催となるので、事前に資料を作成し目を通した上で委員会に参加したり、学年ごとのまとまりの報告をしたりというようなことを実践した。
・生徒の状況が共有化された
・各学年からの生徒の情報は、各学年の特別支援教育担当者が事前にまとめ、校内委員会を行っている。
・会議時間の確保
・低中高に特別支援コーディネーターを配置。
・具体的な手立てや役割分担を確認すること
・時間を区切って、延々の話が伸びないようにしている
・早急に協議が必要な場合は臨時に開催している。委員会以外でも教員間で日ごろから情報を共有している。
・特別支援教室の先生方との連携
・コーディネーターを低学年・中学年・高学年それぞれに置くことで学校全体の共有につながった

４－５　今後の課題と感じていることは何ですか。 (25件の回答)

・関係機関との連携をさらに図ること

・毎回、検討する人数が多く、時間がかかる。
・多種多様な家庭環境に応じた支援や対応が必要である
・教員の空き時間がなく、生徒への対応時間がない
・校内委員会の時間設定が難しい。
・指導方法の充実、地域、関係諸機関との連携
・メンバーを固定化しないで構成していくこと。
・職員間周知の時間の確保
・各コーディネーターの特別支援教育力向上及び機能的な役割分担　・拠点校としての特別支援教育力の実践的向上
・時間の確保
・検討時間が足りないことがあり、校内委員会を増やしたくても、巡回指導員との日程調整が難しい。
・特別支援教育コーディネーターの育成
・対応を協議してもうまくいかないこともある。
・対象人数が多くなり、十分に話し合いの時間が確保できない。
・会議の時間が十分に取れない。
・特になし。このまま継続していく。
・校内委員会を細分化して、時間の確保や回数の減少などを考えていく。
・不登校傾向の生徒との線引きが難しい
・校内委員会での内容を各学年の特別支援教育担当者が学年内で共有する時間の不足
・会議時間の確保、案件の増加
・校内委員会の開催増による日程調整
・管理職の意見がそのまま通ることが多い。もっと発言をし、良い策を考える場にしたい。
・校内委員会以外のメンバーは児童の情報を把握できない。
・臨時で開催する日程の調整
・特になし

４－６　特別支援教育コーディネーターは何人指名していますか。

33 件の回答

４－７　校内委員会での特別支援教育コーディネーターの役割は何ですか。（31 件の回答）

・司会、まとめ
・企画・立案・進行
・司会進行、助言など
・司会進行
・司会と校内調整
・会の開催と司会進行
・全体の進行、検討事項の提案
・司会進行、専門的アドバイス、年間計画作成など
・担任と巡回指導教員をつなげること、内容を他の教員とも共有すること。
・会の調整役、決定事項の遂行確認
・特別支援教室、在籍生徒、担任、家庭をつなぐ役割
・関係機関との連絡調整
・校内委員会運営
・スケジュール管理や司会、支援の方法について共に考える。
・個別指導計画、生徒情報の共有など
・校内委員会の運営・調整　支援に関する書類作成の声掛け　担任の相談をもとに特別な支援が必要な児童の状況を整理・分析　関係機関への連絡・調整　行動観察
・該当生徒と担任、通級とのつなぎ役
・要配慮児童及び当該担任指導に関する情報収集、情報発信
・決定事項の各学年・専科への伝達
・児童の実態把握、特別支援学級等への通級調整
・学校全体の特別支援教育の推進
・全体の調整や連絡、情報のまとめや外部との連絡調整など。
・校内での調整
・進行・管理
・校内委員会の運営、副籍交流のコーディネイト、巡回相談担当
・各学年の状況把握、会の司会進行、担任への具体的な指示、助言など
・各学年の状況把握、特別支援教育推進
・会の議事進行等
・委員会での司会進行・記録・資料作成・資料提供・保護者面談に参加
・校内委員会の連絡調整、会の司会
・学年の橋渡し

４－８　特別支援教育コーディネーターを複数指名している場合の、役割分担は何ですか。（20 件の回答）

・主担当と各学年担当
・①校内における業務 ②校外の外部機関との連携、連絡調整
・学年の分担
・各学年部会からの聞き取り

・複数指名 該当せず
・〇低・中・高学年→担当学年における要配慮児童の特性把握及び教員への助言、保護者面談への参加　〇養護教諭→要配慮児童等の保護者窓口及び教育相談
・校内委員会の進捗管理など
・特別支援教室・副籍交流・巡回指導訪問・特別支援学級
・全体進行とそのサポート
・１名は通常級教員、もう１名は支援学級の教員
・通常学級代表（専科）、通級指導教室担当、固定級代表、養護教諭
・会の司会進行や資料等の準備など、分担して運営準備に当たれるようにしている。
・公務の割り振り
・下学年担当、上学年担当、特別支援教室担当、難聴言語通級指導学級担当　など
・各学年代表
・校内・校外の対応など
・単独
・資料の確認を複数でチェックする。
・低学年、中学年、高学年から一人ずつ＋養護教諭＋生活指導主任
・低学年・高学年などの分担

問５　特別支援教育における ICT 機器の活用について伺います。

大型提示装置の活用について成果を教えてください。（30 件の回答）
・子供にとって興味・関心を高めることに役立っている。
・今まで黒板に書いていた時間を事前にタブレットなどに用意しておくことで時間短縮につながる。OHC と連携し記述や作品の共有がスムーズにできる。など
・提示物の明確化、視覚化することで理解度が増す。
・教材提示の視覚化
・視覚的な理解
・とても有効
・タイマーなど時間を視覚で分かりやすくしている。
・視覚的に伝えやすい
・情報を視覚に訴えることができる
・手元や資料の拡大提示がリアルタイムで可能になり、効果的効率的に活用できている。
・視覚化支援が増加
・一つの教材を一斉に集中して見ることで、理解しやすくなる。
・子供たちの学習意欲が喚起されたこと。視覚化による理解が格段に進んだ。
・児童と同じ目線での提示ができる・
・すぐに画面に表示できる。
・教材提示　デジタル教科書の活用
・書画カメラなど、実物を大きく提示でき、児童の興味をもたせることができた。
・大変教育効果があった。

・いつも教室にあるので、映像教材を効果的に利用しやすくなった。
・視覚的に大きくわかりやすく資料を提示できることや見やすさ。
・映像提示、タッチペンの使用
・児童に視覚で伝えられる
・ICT 環境が整いつつあり、短時間の準備で教科等の授業で生かされている。
・資格優位の児童に対しては極めて有効
・視覚支援
・視覚化により、学習内容等への理解が深まった。
・同じ機種なので使いやすい
・視覚で指示が入る児童にとって学習に取り組みやすい。
・ユニバーサルデザインの視点での視覚化が図れる
・資料提示など全体で共有する場面で活用できた

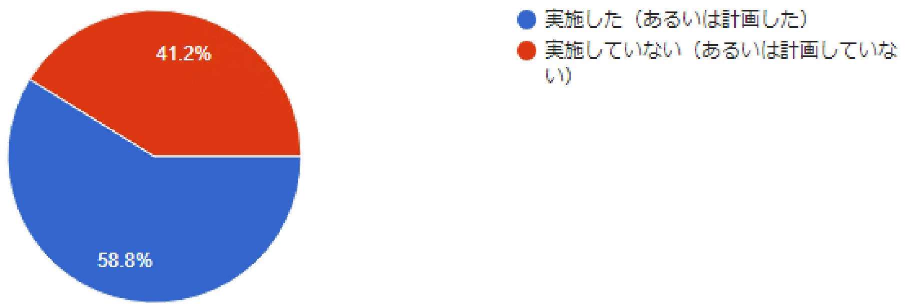
同じく課題を教えてください。 (25 件の回答)

・気が散らないようにすること。
・ビッグパッドの大きさが人数の割に小さい。
・教材開発に時間がかかる
・機械の不具合
・楽しい教材だけにならないようにする。
・あまりまだ活用できていない
・多様な活用の広がり
・機械の不具合 メンテナンス
・広くはない教室が、一段と狭くなってしまった点。
・設置されていない特別教室があること、ネット環境を必要とする表示の遅延
・教室内で、見易さが異なり、集中できない児童もいる。
・大型提示装置による視覚化と紙ベースによる視覚化の使い分け。
・画面の大きさ上、遠くからは文字が見にくいこともある。
・準備に少し時間がかかる、ケーブルが心配
・学級によって、使用頻度が違う。
・接続が大変悪い。
・特に今のところ感じてはいない。
・インターネット環境の整備
・場所をとる
・ネットワークの脆弱性
・教員研修の充実
・黒板の専有面積がかなり大きいので、大型モニターにしてくれたほうが、黒板の全面使用できるので学習が進めやすい。
・視力低下につながらないか心配。
・通信環境の脆弱さ
・特になし

問６　通常の学級の児童・生徒と特別支援学級の児童生徒の交流及び共同学習について伺います。

６－１　交流や共同学習を実施（あるいは計画）しましたか。

34 件の回答



「実施した（あるいは計画した）」を選んだ方へ伺います。

６－２　成果について教えてください。（18 件の回答）

・協働的な学習は個の思考の向上に大いに役立っている。
・障害についての理解が深まった。
・特別支援学校在籍児童への理解
・お互いの良さを認め合えた
・障害教育について自然と理解できるようになる。
・相互理解につながる
・相互理解の促進
・学年運動発表会の演技の練習から特別支援学級と通常学級と一緒に行うことで、親しみをもち、本番では、一緒に喜び合うことができた。
・運動会練習を共同で行うことで大きな集団の中で学びを深めることができた。
・感染症予防のため実施できず。
・理解推進が図れた。
・特別支援教育の理解を進めるために有効であった。
・通常学級の児童へ、特別支援に対する理解を深めた。
・生徒が積極的に授業に取り組むことができる。
・他者理解など、コミュニケーション力の向上につながっている。
・運動会、合唱コンクールなどの学校行事を通じて、お互いの多様な考え方を学ぶことができた。
・障害者理解が進んだ。
・コロナ対応を踏まえた活動ができた

同じく課題について教えてください。（16 件の回答）

・コロナの状況により、複数人での話し合い活動ができなくなる時期が出てきた時の対応
・交流する在籍校との連絡調整が大変である。
・学校での学びを自分たちの生活に広げること
・機会がまだ少ない

・事前の指導をしっかりと行いたい。
・うち合わせの時間を確保すること。
・交流の際の教員数不足
・練習日程などを合わせることが難しく、特別支援学級の担任は、学級内が復籍の場合、担当の児童を残して練習に参加することがある。
・病状により交流回数に制限がある。またコロナも同様。
・計画したが、コロナのため、あまり回数が取れなかった。
・拠点校なので、自然に生活しているのが普通であり、それが逆に課題。
・授業時間が限られているため、時間の制約が大きい。
・さらに計画的に交流ができるようにしていくこと。
・コロナ禍で実施できる取組の策定
・コロナ禍による活動制限
・今後の交流活動の借り方の検討

「実施していない（あるいは計画していない）」を選んだ方へ伺います。

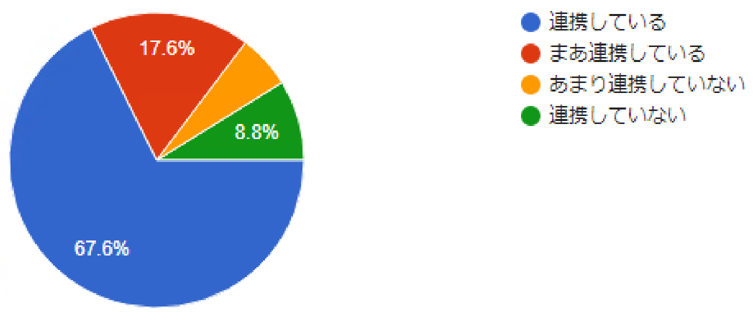
６－３　なぜ、「実施していない（あるいは計画していない）」のか理由を教えてください。（13 件の回答）

・コロナ禍で外部との接触をなるべく少なくする必要がある。
・コロナ禍で活動が制限されているから
・コロナのため直接交流はできなかった。手紙のやり取りのみ
・コロナ禍であり、交流がなかった。
・コロナ感染予防のため
・コロナのため、交流できていない。〈３年前までは特別支援学校などとの交流を行っていた。〉
・新型コロナウイルス感染症対策
・特別支援学級が設置されていない。コロナのため近隣校と交流できない。
・時間の確保ができない
・特別支援学級設置校でないため、効率的な計画がしづらいため。また、副籍児童は全て間接交流であるため。
・校内に特支学級がないから
・特別支援学級が本校にない。
・機会を作ることができなかった

問７　通常の学級と特別支援教室との連携について伺います。

７－１　通常の学級と特別支援教室との連携をしていますか。

34 件の回答



「連携している」または「まあ連携している」を選んだ方へ伺います

７－２　成果について教えてください。（28 件の回答）

- 特別支援教室の教員に授業を見てもらってアドバイスをもらえること。
- 特別支援教室の意義の理解につながっている
- 特別支援教室の担当教員と担任のコミュニケーションが増えると指導の改善に効果があった。
- 担任と巡回指導教員とが常に情報共有をしながら該当児童の指導に当たっている。 年度内に２名が退室することができた。
- 在籍学級での困り間を巡回指導教員に伝え、指導に生かす。
- 情緒の安定を保てている
- 児童理解と支援について共有でき、指導に生かすことができる。
- 通常ではフォローしきれていない部分を支援教室で学べている。
- 子供の様子を多面的多角的にとらえることができる。担任と支援について共有化できている。
- 情報を共有することができた
- 支援教室での指導や当該児童の状況について情報交換がなされており、双方ともその後の指導に生かされている。
- ３年生に特別支援教室の理解授業を行い、どのような困り感で通っているのかを理解できた。
- 児童の対応について共通理解が図れる。
- ＳＳＴ授業を通常学級でも行っている。
- 特別支援教室の教員が通常学級を参観し、課題のある児童を把握した。
- 運動会や移動教室に一緒に参加し、高めあうことができた。
- 特別な支援が必要な生徒の特別支援教育の充実が図れた。
- 授業交流等行っている。運動会の表現運動などでも一緒に練習を行ったりすることができた。
- 通室に対するハードルが下がった
- 児童の共通理解につながった
- 巡回指導教員が通常学級の状況を見ることで、特別支援教室の改善に生かしている。
- 児童理解が深まった。具体的な指導や支援の仕方を共通理解することができた。

・情報共有
・児童理解が深まっている
・連携していない
・特別支援教室で学んだ行動を教室にいかせている。
・教室で学んだことを担任と共通理解し、お互いに活かす
・多様な考えを受け入れられるようになった

同じく課題について教えてください。（23 件の回答）

・学級担任が特別支援教室に行って授業を見て学ぶこと。
・特別支援教室に児童が通っていないクラスでの認識
・継続して指導を行うことの大切さは通常級よりも大きいが、実際は年度毎の変化が大きく軌道に乗るまでに時間がかかる。
・情報共有するための時間の確保
・支援教室で身に付けたことを在籍学級で生かす
・小集団と大集団でできることをそれぞれ考えていきたい。
・生徒同士の連携はできていない。
・さらなる連携の強化の在り方について検証すること
・打ち合わせ時間の確保
・経験知や特別支援教育への理解が足りない教員にとっては、成果が現われにくい傾向にある。
・日程調整が難しい。
・通常学級、特別支援学級双方の担任から積極的な発信が少ない。
・準備時間と教員の共有する時間が十分ではない。
・さらに計画的に行っていきたいが、授業進度など考えていかなければならない。
・話し合う時間がなかなかとれない
・特別支援教室に通級する生徒の中に人目を気にしてしまう人への対応や配慮の在り方
　時間がない。
・時間の設定
・教員間の情報共有する話し合い時間等の確保
・連携していない
・授業を抜けることで、担任が補習を行っている。
・情報交換の時間の確保
・特になし。

「あまり連携していない」または「連携していない」を選んだ方へ伺います。

７－３　なぜ、「あまり連携していない」、「連携していない」のか　理由を教えてください。（0 件の回答）

問８　小中連携、一貫教育における取組の推進について伺います。

特別支援教育の視点から、小中連携を進めるうえでカリキュラム連携について成果を教えてください。（28 件の回答）

・発達段階に応じた指導について検討できたこと。

・6 年生から中学１年生への情報の交流を行うことで、特性に応じたカリキュラム作りをしている。
・小中連携による指導の継続性が重要である。
・通常学級における支援レベルの実践（UD についても）の統一　・個別指導計画の作成とその引継ぎについて
・引継ぎをしっかり行っている。
・特別支援教育の理解推進
・個の特性について共通理解していくことで指導していきやすくなる。
・小学校の情報を共有することで事前に対応を考えられる。
・カリキュラムは連携できていない。
・情報の共有
・育ちと学びという視点が生かされており、連携しやすい。
・進学の際の段差を小さくすることができる
・小中でカリキュラム連携することで、児童が戸惑うことが少なくなっている。
・小中連携の分科会で英語、ICT、評価、生活指導などに分かれて連携している。
・学期に一回、進捗状況について確認し情報を共有している
・教員同士が知り合うこと、子供の話ができることですが、今年度は連携が十分にできていません。
・情報共有により、入学当初から適切な対応ができる。
・中学校の先生に授業を見ていただいたことで、アドバイスをうけることができた。
・自動生徒の課題の検討が行われ、ピンポイントではあるが、必要な学習の充実を図ることができている。
・中学校との連携において、中学とはどんなところなのか説明会に参加したり、動画を視聴したりすることができた。
・支援が必要な生徒への学習のアプローチ方法の統一ができた
・小中の教員の情報交換が多く行われ、学習内容のスムーズな移行につながった。英語に重点を置いて取り組んでいる。
・英語科の相互授業参観により、意識が高まった。
・個別支援シート等の引継ぎや継続的な話し合い
・情報の共有が徐々にではあるができてきている
・高学年を中心に授業規律等の意識づけを行うことで進学がスムーズに行える
・体力テストカードの引継ぎ
・中学校へのつながりがスムーズになった

同じく課題を教えてください。 （28 件の回答）

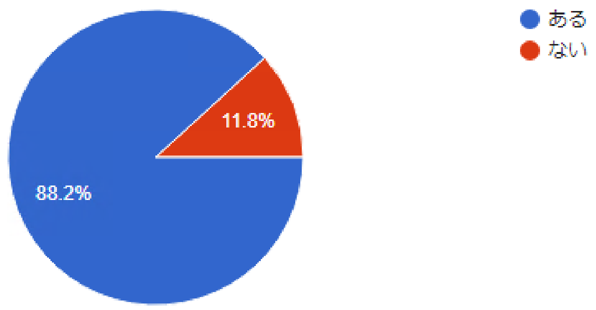
・授業参観を含めた連携を進めること。
・具滝的なプログラム内容までを共通理解できていない点
・今年、リモートで情報共有を行ったが物足りなさがあった。危機の不具合などが原因で
小中の担任制の違いが、特別支援学級が必要な児童にとってとてもきついものであるようだ
・調整時間の少なさ

・支援シートを統一していきたい。
・特別支援教室や個別指導計画などの情報を各小学校から確実に引き継ぐ
・連携を図ること。
・打ち合わせ時間の確保
・他の中学校区の成果・課題について、情報提供がほしい。
・情報共有などの時間確保
・異動した教員もすぐ分かるような例示が必要である。
・中学校の特別支援学級との連携が十分でなく、９年間を見通した指導支援がなされていない。特に学級の児童が中学校に上がった後、小学校からの連続的な指導支援がなされておらず、戸惑うこともある。
・コロナ禍による連携は難しいと思います。ＩＣＴを活用しても直接会うことが大切。
・連携をとるための話合いの時間があまり取れなかった。
・中学校の支援教室の見学は必須だと思います。
・教員の異動があること、小学校は 2 校の中学校に生徒が進学すること、小学校は強化担任制ではないことがあげられる。
・もっと交流を増やせればと思うが、個別対応が難しい。
・生活指導の方法など統一していく必要がある
・連携をすすめられなかった
・小中間の情報共有
・共有する場や時間が足りない。
・オンラインで頻度を増やす
・SSW の活用
・まだまだ課題が大きい
・細やかな引継ぎを行う場がない
・特になし

問９　教育センターでは、巡回相談として課題のある児童・生徒に関する学校からの相談等に応じています。巡回相談について伺います。

９－１　巡回相談を利用したことはありますか。

34 件の回答



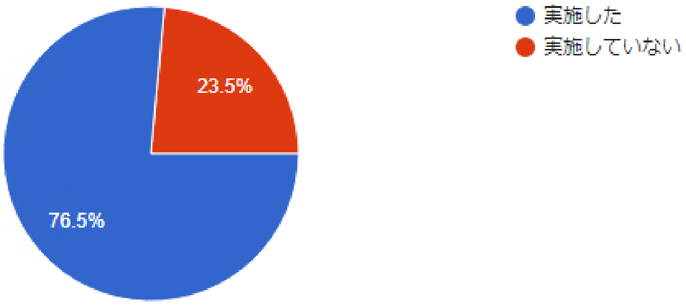
９－２　「利用した」場合、主にどのような理由で利用しましたか。（該当するものを１つ選んでください。）

30 件の回答

問１０　教員の資質・専門性の向上のための研修について伺います。

１０－１　校内で特別支援教育に関する教員研修を実施しましたか。

34 件の回答



１０－２　実施した場合、どのような内容の研修を行いましたか。（24 件の回答）

・児童理解
・特別支援教室で行われている具体的な指導内容の共通理解について
・特別支援教室に在籍する生徒の情報共有、指導方法の共通理解
・読み書きアセスメント　・ディスレクシアについて
・特別支援教育の理解
・特別支援教室の役割、指導内容について。
・特別支援教室の概要と実際の指導内容について　発達障害の児童の特性と支援方法について　LD 傾向の児童に対して通常学級でできる支援について　専門家診断
・特別支援教育全般について
・〇特別支援教室について　　〇要配慮児童・保護者への対応について
・授業のユニバーサルデザイン化
・支援が必要な児童やその保護者への対応の仕方、発達検査の見方
・ソーシャルスキルトレーニング、障害特性
・巡回相談員の方に講演をしていただいた。
・困り感のある児童への指導の仕方

・授業改善、ダウン症の障害特性の理解
・他者理解をするために必要なことなど対応の仕方などについて
・WISCⅣについて、特別支援教育について
・特別支援教育について
・年度当初、校内研修で特別支援教育マニュアルを読み合わせして、共通理解を図っている。
・難聴言語通級指導学級が行っている個別指導の方法など
・市の特別支援教育の体制等の周知など
・巡回指導教員による特別支援教室についてのオリエンテーション。 教育センター職員による巡回相談・教育相談の研修
・講師を招いての講演会「学習障害への理解と具体的な取り組み事例について」
・特別な支援を要する児童についての児童理解について

１０－３　今後、どのような研修が必要と感じていますか。 (29 件の回答)

・特別支援教室における指導を見て学ぶこと。
・保幼小中、全ての連携を含めた特別支援教育のあり方
・障害種別ごとの教育効果を高めるための指導法
・発達障害に関する研修
・生徒理解力の向上　個別指導の在り方
・特別支援が必要な児童への支援の内容や方法。
・心のケア
・児童の特性に合わせた指導の在り方について
・支援を要する生徒への対応方法
・〇自閉症スペクトラム児童への通常学級における指導と支援、同保護者への対応
・交流や共同学習について
・WISC の見方
・特別支援学級が基本的にどのような学級か基礎的な理解を図る研修。
・通室している子供の指導を通常級でどう生かしていくか。周りの子供たちへの啓発。
・継続していくこと。
・医療や支援センターとの連携の仕方
・授業改善
・実際に特別支援学級児童とかかわることが必要だと考える。
・支援が必要な生徒への接し方等
・特別支援教室についての共通理解
・通常学級に通う、課題のある生徒のアセスメントを十分に行い、対応の仕方を特別支援学級の教員から聞く。
・児童理解について(2 件)
・障害に応じた対応可能な手立て
・実際の授業場面での指導の充実について
・全教科に共通する内容の徹底と重要性について
・個別支援計画の記入の仕方や、支援方法についてなど
・上記のように、学校の課題についての学習会
・具体的な支援の仕方

２　特別支援教室における指導について

問１　平成３０年度に全ての小学校に特別支援教室を設置し、令和２年度に全ての中学校に特別支援教室を設置しました。特別支援教室について伺います。

１－１　特別支援教室が設置されたことによる成果は何ですか。（32 件の回答）

・子供の移動にかかる時間が無くなったこと。
・それまであった通級教室に通うより、指導の日数、回数が増えたこと
・継続して教室に通うことでできなかったことが少しずつ改善される
・自校で個別指導を受けられること
・通いやすくなった。
・情緒の安定
・保護者の方の送り迎えがなく、希望する児童が支援を受けやすくなった。
・個に応じた指導や全体での共通した意識での指導
・在籍校で必要な指導を受けることができる。巡回教員と在籍校担任の連携しやすくなった。
・生徒の個に対する対応がしやすくなった
・授業を抜ける時間を最小限にでき、保護者負担も軽減されたこと。
・教員にとって、特別支援教育がより身近になったこと。
・通いさすさ、支援教室担当教員との連携のしやすさ
・困り感のある児童を専門的な立場の教員と一緒に見立て、支援の方法を探ることができ、保護者と一緒に児童を支援することができる。
・物理的にも精神的にも子供が支援教室に通いやすくなったこと。
・校内で通室ができる。
・コミュニケーション能力の向上
・小さな集団での障害に応じた指導ができること。
・特別な支援が必要な生徒に、コミュケーションスキル等、必要な指導をすることができた。
・課題のある児童に個別に対応していただける。
・自校で学習できることにより、保護者の通学への壁は薄くなった。
・発達障害等を持っている生徒が、特別支援教育を受けやすくなった。
・一人一人の特質にあった対応をすることができることは大きな成果であると考える。
・コミュニケーション等に課題がある生徒が、特性を理解しコミュニケーションについての課題が・解消してきている。
・特別支援教室に入厩しやすくなった
・情報共有がしやすくなった。支援への方向性が明確になった。
・個別指導や小集団指導で児童のスキルアップにつながっている。
・児童の移動負担がない。
・児童の学校生活が充実すること
・特別支援教育が身近になったこと
・集団適応能力の向上につながった。通常の学級において、通室で学んだことがいかせている。

・特別な支援が必要な児童への指導
・苦手な分野を克服することができる

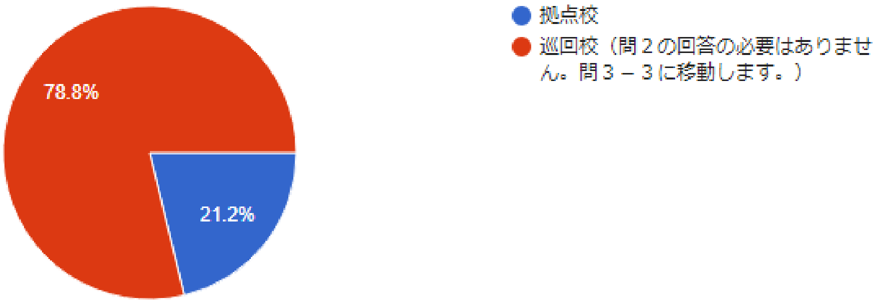
１－２　今後の課題と感じることは何ですか。（29 件の回答）

・力のある教員の配置、教室の増設
・特別支援教室に入室する児童数が増えることによる、担当の先生の負担と指導教室の不足
・支援を必要としている生徒は不安定な状態でいることが多い。欠席することも多くなる傾向である。不登校という位置づけで入室できない生徒への支援の在り方を今後、早急に考える必要がある。また、支援級に配置されている先生方が専門員を活用するにあたり、教材開発等どんどん活用できるよう専門員への指導も重要である。
・拠点校になることへの体制づくり
・指導時間が増えるとよい
・対応生徒の増加に伴う通常授業への影響と配置教員数
・希望する児童ができる限り通えるように人数の枠を増やしてほしい。
・ボーダーにいる生徒への対応
・指導期間が原則１年になることにより目標をどこに設定するか。指導期間が短くなることにより・短期間でアセスメント、指導計画を立てる必要がある。
・打ち合わせ時間の確保
・〇巡回教員の資質・能力面の向上　〇市内小学校の特別支援教室における「開いた」指導・支援面と中学校支援教室への接続
・支援教室担当教員と保護者との面談などの時間設定
・巡回の日数は増える、巡回指導員が減り、専門性を備えた教員が配置されるかどうか。
・教員同士の連携
・週に２時間との制限がある中で成果をあげることが難しい児童もいること。
・授業を抜けていくことに対する抵抗感が大きいこと
・集団が苦手な生徒は、在籍学級に入りにくさを感じる。しかし、特別支援教室には不登校だと入級できない。なんとかしてあげたい。
・通級指導教室の担任、学級担任、保護者との連携
・さらに特別支援教室に対しての知識を得ることが大切になる。
・人数が増え児童個々への適切な対応ができるのか
・人の目が気になり、教室をぬけることをいやがる生徒への対応や配慮
・週当たりの時間が足りない
・指導回数の増加
・対象児童が年々増加する中で、入・退級の基準をより明確にしていくこと
・限られた回数でどのような学習を進めるか。教員の質の向上。
・入室希望の過程が増加傾向にある。１年退室がむずかしい。
・特別な支援が必要な児童が多くいるが、受け入れる余裕がない
・児童自身が必要性を感じられるような指導の工夫
・特になし

問２　個別指導計画について伺います。

あなたの学校に該当するものを選んでください。

33 件の回答



「拠点校」を選んだ方に伺います。

２－１　通室児童・生徒に対して、個に応じた指導を展開するために工夫していますか。

7 件の回答

２－２「工夫している」場合、具体的にどのように工夫していますか。（7 件の回答）

・個別の指導計画に沿って指導の方向性を確認し、修正が必要な時には見直している。
・生徒の特性の観察
・児童の適性を見極めて指導をしている。
・質問の意味が不明。個に応じた指導をする上で、個の特性に応じて工夫するのが当たり前です。何をもって工夫していますかという質問は意味が分かりません。
・実態をよく把握して、個にあっためあてを作成している。
・全体指導の後に個別支援を入れたり、学習支援員の配置をする
・児童理解につとめ、教材・教具を工夫している。また常に教室の先生で話し合いを行っている。

問３　対象児童・生徒の指導の成果の把握及び退室の検討について伺います。

３－１　目標の達成度合について、いつ、どのように評価していますか。（7 件の回答）

・各学期ごとにすべての児童の成果と課題について複数の巡回指導教員で話し合い評価を行っている。そのほか入退室検討委員会の前に随時検討の時間を設けている。

・学期ごとに生徒・保護者に対して面談を行っている、その場面で総括している
・年度末に退室か継続かを見極めるようにしている。必要な児童には年度途中でも校内委員会を開いて話し合っている。
・特別支援教室の教室会議にて。保護者や担任との情報共有にて。
・校内委員会による検討
・授業観察など
・学期末にせせらぎ教室の先生で行い、また担任との話し合いで評価している。

３－２　指導により改善が見られた場合には、指導時数の見直しをどのようにしていますか。（7 件の回答）

・保護者・担任・巡回教員が話し合い、子供に合わせて指導時間を週１時間にしたり、隔週での指導にしたりと調整している。校内委員会で確認の上、段階的に減らしている。
・校内委員会ではかっている
・個別の指導は残すようにしている。
・以前と違って、指導時数を見直すほど元の指導時数が多くなはい。
・校内委員会による検討
・週当たり２時間以内となっているので、足りないと思ってもなかなか増やせない現状がある
・校内委員会で話し合って決めている

問３　指導の成果の把握及び退室の検討について「巡回校」を選んだ方に伺います。

３－３　退室の判定はどのように実施していますか（23 件の回答）

・校内委員会
・校内委員会を開いている。
・校内委員会による判定（担任と特別支援教室担当者と校内委員会出席者の同意）と保護者の最終的な判断
・①支援教室巡回教員とコーディネータ、学級担任を交えて意見交換 ②学年会、特別支援員会（校内委員会：管理職同席）等で承認 ③保護者面接時に保護者の意向を確認する ④再度、①～③の手順で退室の判定を行う ⑤担当指導主事に相談
・校内委員会内での検討
・指導のねらいを達成した場合
・校内委員会で、特別支援教室の先生とともに話し合いをしている。
・支援委員会で検討、保護者との三者面談、巡回教員と検討
・校内委員会で計画的に検討している。
・校内委員会にて。
・校内委員会を開き、保護者の思いも聞き取りながら、巡回指導員と一緒に判定する。
・校内委員会で入室の目標が達成されたかどうかを判断する。
・保護者や本人の希望に基づき、校内委員会で検討する。
・校内委員会で行うことになっている。
・校内委員会において、巡回指導員、巡回心理士等と検討し判定している。

・校内委員会及び保護者との面談
・特別支援委員会
・校内委員会で情報交換し、校長決裁のもと決定する。
・校内支援委員会等での検討
・校内委員会にて審議する
・巡回指導教員からの打診。その後校内委員会で検討し、決定後保護者の意向をうかがう。
・目標が達成されたかどうか

知的障害特別支援学級及び通級指導学級（言語障害・難聴）における指導について

あなたの学校に該当するものを選んでください。

33 件の回答

3　知的障害特別支援学級における指導について

問１　新しい教育課程について校内で検討した成果について教えてください。（ 7 件の回答）

・主体的な取り組みが行えるような支援体制の強化
・指導・支援方法及び子ども理解の促進
・学級主任と学校長による検討を行うことができた。
・ICT をふんだんに活用し、SDGｓ等にも取り組めた
・主体的、対話的、深い学びについて検討し研究授業に生かせるようにした
・ICT 活用が推進され、発表等の活動が活発になった。お互いの考えを知る機会になった。 教員にとっては指導方針が明確になった。
・主体的・対話的な学習を意識した指導の充実

同じく課題について教えてください。 （ 6 件の回答）

・各教員が学ぶための時間確保
・全校的な検討は行えていない。
・ICT 環境の脆弱さ
・上記のことに対しての指導方法をさらに研修していくこと。

・指導経験の少ない教員の指導力向上
・教科等、授業におけるさらなる指導の充実

問２　ICT 機器を活用した授業改善について伺います。

２－１　大型ディスプレイの活用方法で工夫していることは何ですか。（7 件の回答）

・情報共有
・校内研究など活用し、活用の実際を学ぶ機会の設定
・動画・画像等の活用による視覚支援
・各自の考えが共有できるようにしている
・視覚的に児童に理解させたいときや何か説明するときに活用するようにしている。
・必要頻度に合わせて校内に配置している。
・見やすさやわかりやすさ

２－２　活用した成果は何ですか。（7 件の回答）

・見える化での授業展開
・活用が広がった
・深い理解につながった。
・個別の考えが出しやすく、高めあえた。
・児童の集中力の向上（全員ではないが）
・準備時間を短縮し、スムーズな ICT 活用につながっている。
・意欲的に学習に取り組めるようになってきた

２－３　今後の課題と感じることは何ですか。（6 件の回答）

・１人１台タブレットとの共有
・特別教室など未設置教室への設置
・環境の脆弱さ
・継続して使用できるように取り組んでいく。
・ICT 機器の効果的活用
・活用方法の更なる充実

問３　言語に関する能力を育成するために、言語環境の整備や各教科等における言語活動の充実について、どのような点に重点をおき工夫していますか。具体的な取組、成果、課題について教えてください。

取組（7 件の回答）

・めあてを示し振り返りを毎時間行う
・校内研究「国語」において、学校全体で取り組んでいる。
・自立活動として実施している朝の会や国語の授業において、コミュニケーション能力を高めるためのロールプレイの実施等。
・視覚優位、聴覚優位に対応した指導

・分かりやすい言葉で伝えること。短く、端的に。
・作文指導を一人一人め細かく指導している。
・個に応じた反復指導

成果（7 件の回答）

・生徒が到達目標を意識するようになった
・実際の授業を通して具体を学び、また、講師の方から指導をいただき、知識として学んでいる。
・場面による会話や言葉遣いの充実が図れた。
・個別に対応できた
・デジタル教科書の活用やいつも決まった言葉で話すことにより、児童の言語理解へとつながっている。
・正しい文章表現が適切な言語活動につながっている。英語では豊かなパフォーマンスにつながっている。
・読み書き指導の定着

課題（6 件の回答）

・話し合い活動の活性化
・校内研究の学びを通常の授業につなげていくこと。また、高寧研究を含めて各教員の学び時間の確保。
・準備が大変
・活用できる教材教具がまだたくさんあると思うので、その活用方法を考えていく。
・ICT 機器の活用をさらに促進と他者の表現に触れるの増加
・授業での効果的な ICT 機器等の活用

問４　個別指導計画に基づき、個に応じた指導を展開するために、工夫していることはありますか。具体的な取組、成果、課題について教えてください。

取組（7 件の回答）

・担任だけでなく学年より校内委員会へ共有している
・校内委員会での話し合いを活かす。
・週一回、学年会の中で個別指導計画に基づいて児童の実態の共通理解を図る。
・生活面で、片付けられない児童への箱の用意など
・作成した資料を情報共有
・週に１度校内委員会を開くことで、個別指導計画に基づく最新情報の共通理解ができている。
・校内支援員会などでの検討

成果（7 件の回答）

・個別指導に対しての意識が高まった
・担任だけの視点に偏らない。
・一部担任で児童の評価を行うことができている。
・児童自身の負担は少なくなった。

・一人一人に合った対応をすることで、落ち着いて学習に取り組むことができた。
・生徒一人一人への適切な対応につながっている。他学年の生徒の共通理解もできている。
・個別指導計画の内容の改善・充実

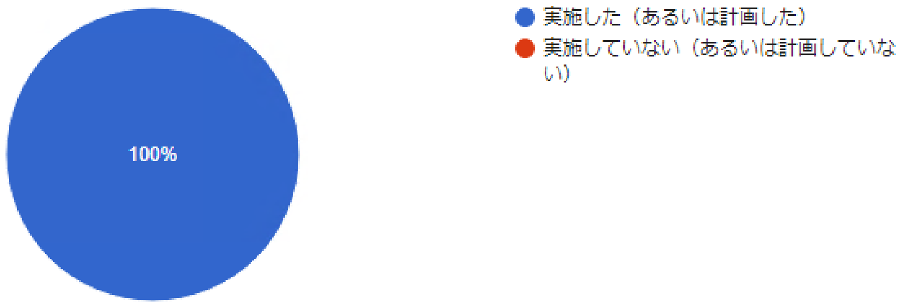
課題（7 件の回答）

・資料作成の時間が膨大である
・校内委員会の時間の確保
・一部担任との共通理解ができていない。
・保護者の理解が得られるときと得られないときがある。
・今年度の成果を次年度につなげるために引き継ぎをしっかり行うこと。
・特別支援教育担当教員の当該学年内での情報共有の徹底
・個別指導計画の書式の改善・充実

問５　通常の学級の児童・生徒と特別支援学級の児童生徒の交流及び共同学習について伺います。

５－１　交流や共同学習を実施（あるいは計画）しましたか。

9 件の回答



「実施した（あるいは計画した）」を選んだ方へ伺います。

５－２　成果について教えてください。（7 件の回答）

・お互いの良さを認め合える活動となった
・相互理解
・大きな集団の中での学びを行うことができた。
・自然に活動できていた。
・通常級の児童と友達になったり、声を掛け合ったりする姿が見られるようになった。
・学校行事では、運動会、合唱コンクールにおいてお互いの多様な考えを学べた。 また、特別支援学級の生徒が通常学級の交流級の授業を受けている。
・人権教育の視点からの指導の充実

同じく課題について教えてください。（7 件の回答）

・交流時間の確保
・交流・共同の際の教員の確保

・回数を多くとることはできない。
・コロナによる回数減少
・今後、どのような取り組みができるのか通常級教員と話し合う場をもっと設定していく必要がある。
・通常学級の生徒の特別支援学級での交流機会の設定
・コロナ対応を踏まえた活動の検討

「実施していない（あるいは計画していない）」を選んだ方へ伺います。

５－３　なぜ、「実施していない（あるいは計画していない）」のか理由を教えてください。（0 件の回答）

4　通級指導学級（言語障害、難聴）における指導について

問１　個別指導計画の活用について伺います。個別指導計画に基づき、個に応じた指導を展開するために、工夫していることはありますか。具体的な取組、成果、課題について教えてください。

取組（2 件の回答）
・事前にヒアリングなど行い、しっかりと対象児童の特性を把握すること
・学期ごとに保護者と話し合いをして今後の方針を決定している。

成果（2 件の回答）
・個に応じた指導が徹底して行えること
・児童の実態に合った支援がなされるようになってきている。

課題（1 件の回答）
・最初の見取りがずれてしまうと方向性が大きく違ってしまうこと

問２　ICT 機器を活用した授業改善について伺います

２－１　ICT 機器の活用方法で工夫していることは何ですか。（ 2 件の回答）
・ICT 支援員のお手伝いを利用して、スムーズな授業が行えるための授業準備、低学年に基本操作の時間を設定していること、教職員向けの活用研修
・子のスキルアップができるための時間を設けるようにしている。

２－２　活用した成果は何ですか。（2 件の回答）
・担任用のタブレットはほぼ毎日使用されている。それだけ、活用されている。
・児童が ICT 機器を上手に扱えるようになった。

２－３　今後の課題と感じることは何ですか。（2 件の回答）

・教員用のタブレットと児童用のタブレットの機種が違うため、キーボードの配列の違い、操作方法の違いがあり、効率的な指導、声掛けができない。WIFI の環境が弱く、複数のクラスで同時にタブレットを使用した授業をすると、電波が弱くなり、ネット環が使えなくなる。職員室に WIFI 用のアクセスポイントがなく、授業準備がスムーズにできない。校長室にもなく、ミートやズームなどの WEB 会議ができない。保健室にもなく、電子出席簿などが導入されても、有線での使用となり便利さに欠ける心配がある。オンライン授業をするための WEB カメラ、マイクも学校に１台ずつしかなく、今後、オンライン授業をするためのハード面の準備が足りない。T コンパスの反応が遅く、他校との連絡、やり取りにとても時間がかかる。

・情報モラルやリテラシーの問題

問３　指導力向上を目指し、専門性を高めるための取組について伺います。

具体的な取組、成果、課題について教えてください。

取組（2 件の回答）

・校内研究で問題解決的な学習のあり方を研究している。

・指導教諭、主観を中心とした若手研修会

成果（2 件の回答）

・毎時間、ねらいをもった授業、児童の活動、思考の場面、まとめ方の工夫を意識した授業展開が多く見られるようになった。

・発問や、授業の組み立てなど上手になってきている。

課題（2 件の回答）

・専門性を高めていくための授業準備をする時間が十分に取れない。校内だけでなく様々なところから事務作業が通達され、それに取り組むだけで時間が無くなってしまう。残業をできるだけ減らすようにと言われるが、実際はできない。ライフワークバランスの重要性は認識しつつも、現実には難しい。

・日々の指導に時間を使い、先輩教諭の授業を見る、学ぶ時間が取れない。